

名勝及び史跡 三徳山
発掘調査報告書 Ⅲ

三佛寺本堂発掘調査
三徳山妙光遺跡発掘調査

平成21年度

鳥取県三朝町教育委員会

序

古くから山岳信仰の霊場として栄えてきた三徳山^{みとくさん}は、国宝三仏寺奥院（投入堂）をはじめとする多くの文化財と、地域の人びとの信仰によって守られてきた貴重な自然環境を伝えていることから、国の名勝及び史跡に指定されています。

その美しい姿は、先人たちの不断の努力によって千年以上にわたり守られてきました。現代に生きる私たちもまた、この努力を継承し、三徳山の姿を後世へと伝えなければなりません。そのためには、三徳山の歴史と自然環境をよく理解することが必要です。

三朝町は平成13年度から「三徳山歴史遺産調査」として、三徳山の歴史と自然環境に関する調査を実施しています。その一環として、平成15年度から埋蔵文化財の調査にも着手しました。

これまでの調査では、投入堂に至る行者道の途中にある「行者屋敷跡」や、三徳川の北側の「大門跡」で遺構を確認するなどの成果をあげてきました。

平成20年度には、三佛寺が実施する本堂の解体修理に伴い、地下遺構の確認調査を実施しました。その結果、前身となる本堂の遺構などは発見されなかったものの、現本堂に関連する遺構を記録し、地盤造成に関する貴重な情報を得ることができました。

また今回、山内に存在する平坦地の調査を実施し、中世の僧坊跡と思われる建物跡を確認しました。三徳山の歴史を明らかにするうえで貴重な成果となりました。

調査にあたっては、文化庁と鳥取県教育委員会からご指導とご支援をいただきました。また、土地所有者をはじめとする多くの方々のご協力をいただきました。衷心より感謝申し上げます。

平成22年3月

三朝町教育委員会

例 言

- 1 本書は、国・鳥取県の補助を受けて三朝町教育委員会が実施した平成20年度三佛寺本堂発掘調査及び平成21年度三徳山妙光遺跡発掘調査の報告書である。
- 2 調査地は次のとおりである。
三佛寺本堂 鳥取県東伯郡三朝町大字三徳1010番地 (三佛寺境内遺跡)
三徳山妙光遺跡 鳥取県東伯郡三朝町大字三徳1007番地
- 3 本書中、三佛寺の漢字表記については原則として宗教法人登記に基づくが、文化財名称等についてはそれぞれの正式表記を用いた。
- 4 本書中、組織名及び役職名はいずれも当時のものであり、現在は異なる場合がある。
- 5 本書中、「図3 三徳山の位置」には国土地理院発行の5万分の1地形図の複製「三朝町全図」(平6中複、第258号)を使用した。
- 6 本書中、「図4 名勝及び史跡三徳山指定地」には国土地理院発行の「数値地図25000(地図画像)三朝」を使用した。
- 7 方位及び座標値は世界測地系平面直角座標第Ⅴ系座標値を使用した。
- 8 レベル高は海拔標高を表す。
- 9 遺構及び遺物の実測は調査担当者と作業員が行い、調査担当者が浄書した。
- 10 調査現場及び遺物の写真撮影は調査担当者が行った。
- 11 掲載遺物番号は取上番号と一致する。
- 12 出土遺物及び調査に伴う資料等は三朝町教育委員会で保管している。
- 13 三佛寺本堂基礎石の所見について、岡山大学名誉教授本間弘次氏にご教示いただいた。
- 14 三徳山妙光遺跡出土遺物の所見について、財団法人鳥取県教育文化財団中森祥氏にご教示いただいた。
- 15 調査全般にわたり、鳥取県教育委員会事務局文化財課のご指導をいただいた。
- 16 調査にあたり、土地所有者をはじめ多くの関係者等からご協力をいただいた。
明記し深謝する。(順不同・敬称略)

三佛寺 輪光院 正善院 皆成院

鈴置末子

文化庁 鳥取県 鳥取県教育委員会 財団法人鳥取県教育文化財団

公益財団法人文化財建造物保存技術協会 新東住建工業株式会社

眞田廣幸(倉吉市教育委員会事務局文化財課長)

凡 例

- 1 遺構の略号の意味は次のとおり。
SF…焼土 P…ピット SK…土坑 SX…油の染み
- 2 遺物観察表の法量記載について、記号の意味は次のとおり。
△…残存値

本文目次

序	
例言	
凡例	
本文目次	
挿図目次	
図版目次	
第1章 三徳山の概要	
第1節 三徳山の地理的環境	1
第2節 三徳山の歴史的環境	4
第3節 三徳山における調査の経緯	6
第2章 三佛寺本堂発掘調査	
第1節 調査に至る経緯と概要	8
第2節 三佛寺本堂の概要	10
第3節 調査の目的と課題	12
第4節 礎石の調査	13
第5節 基壇上面の調査	24
第6節 トレンチ調査	28
第7節 ボーリング調査	32
第8節 調査のまとめ	34
遺物観察表	35
第3章 三徳山妙光遺跡発掘調査	
第1節 調査に至る経緯と概要	38
第2節 調査成果	41
第3節 調査のまとめ	44
遺物観察表	45
図版	
報告書抄録	

挿図目次

図1 鳥取県の位置	1
図2 三朝町の位置	1
図3 三徳山の位置	2
図4 名勝及び史跡三徳山指定地	3
図5 三佛寺本堂周辺地形	11
図6 基礎石の配置	14
図7 基礎石断面	15
図8 礎石1	16
図9 礎石2	17
図10 礎石3	18
図11 礎石4	19
図12 礎石5	20
図13 礎石6	21
図14 礎石7	22
図15 礎石8	23
図16 遺構の分布	25
図17 遺物の分布	26
図18 出土銭貨（一部）	27
図19 トレンチ及びボーリング地点の配置	29
図20 第1・第2トレンチ	30
図21 第3トレンチ	31
図22 地層推定断面	33
図23 三徳山妙光遺跡周辺地形	40
図24 第1トレンチ	42
図25 第2トレンチ	43
図26 遺構の分布	44

図版目次

三佛寺本堂

中扉

三佛寺本堂発掘調査風景

図版 1

- 1 三佛寺本堂（平成16年12月撮影）
- 2 美徳山三佛寺境内絵圖（部分）

図版 2

- 1 調査前（北東から）
- 2 調査前（俯瞰・北東から）

図版 3

- 1 礎石 1（北西から）
- 2 礎石 2（北西から）
- 3 礎石 3（北西から）
- 4 礎石 4（北西から）
- 5 礎石 5（北西から）
- 6 礎石 6（北西から）
- 7 礎石 7（北西から）
- 8 礎石 8（北西から）

図版 4

- 1 礎石 1 墨書（北西から）
- 2 礎石 2 墨書（北西から）
- 3 礎石 4 墨書（北東から）

図版 5

- 1 遺構検出（俯瞰・北東から）
- 2 SF10（北西から）
- 3 SF11（北西から）
- 4 SK 1（北西から）
- 5 SK 3（南東から）

図版 6

- 1 トレンチ設定（俯瞰・北東から）
- 2 第1・第2トレンチ設定（北東から）
- 3 第3トレンチ設定（俯瞰・北西から）

図版 7

- 1 トレンチ完掘（俯瞰・北東から）
- 2 第1・第2トレンチ完掘（北東から）
- 3 第3トレンチ完掘（俯瞰・北西から）

図版 8

- 1 第1トレンチ南壁東部（北から）
- 2 第1トレンチ南壁西部（北東から）
- 3 第2トレンチ東壁（北西から）
- 4 第2トレンチ西壁（南東から）
- 5 第3トレンチ東壁北部（北西から）
- 6 第3トレンチ東壁中部（北西から）

図版 9

- 1 出土銭貨（一部）

三徳山妙光遺跡

図版10

- 1 第1トレンチ調査前（南から）
- 2 第2トレンチ調査前（東から）
- 3 第1トレンチ設定（南から）
- 4 第2トレンチ設定（東から）
- 5 第1トレンチ第1層除去（南から）
- 6 第2トレンチ第1層除去（東から）
- 7 第1トレンチ完掘（南から）
- 8 第2トレンチ完掘（東から）

図版11

- 1 礎石・SK 1（西から）
- 2 SK 9（南から）
- 3 SK12（西から）
- 4 SK15（西から）
- 5 SK16（西から）
- 6 SK17（西から）
- 7 SK18（北西から）
- 8 SK18北部断面（南から）

図版12

- 1 第1トレンチ西壁（南東から）
- 2 第2トレンチ北壁（南東から）
- 3 調査地全景（北西から）

図版13

- 1 出土陶磁器（一部）

第1章 三徳山の概要

第1節 三徳山の地理的環境

1 三徳山の位置と地形

標高約900mの三徳山は、鳥取県のほぼ中央にある三朝町の東側に位置し、三朝温泉から東に約8km、日本海岸から南に約12kmである。

鳥取県3大河川の1つ天神川の支流として、俵原集落を源流とする三徳川が三徳山北麓を東西に貫く。その侵食作用により形成された三徳溪谷の傾斜は30度から40度と急峻である。

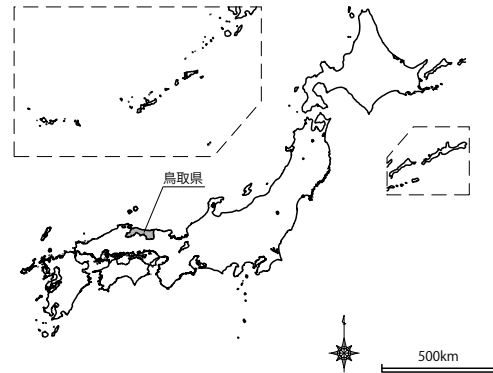


図1 鳥取県の位置

2 三徳山の地質構造

新生代古第三紀に貫入してできた花崗岩が基盤にある。この基盤の上を、新第三紀中新世の「鳥取層群」に属する投入堂凝灰角礫岩類や小鹿凝灰角礫岩類が覆い、さらに上部を鮮新世の「三朝層群」に属する三徳山安山岩類が被覆している。

三徳山中腹部分を形成する凝灰岩類は比較的軟らかく逆に上部の安山岩や基盤の花崗岩は硬い。この地質構造が影響し、境界部には断崖や岩窟など独特の奇観が多く形成され、三徳山の景観の大きな特徴となっている。

国宝三仏寺奥院（投入堂）に見られるように、山内の建造物のほとんどが、こうして形成された特異な地形を選択して建てられている。

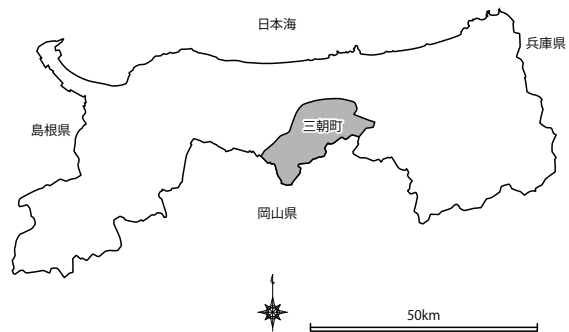


図2 三朝町の位置

3 三徳山の自然環境

冬季は北西からの季節風をまともに受け、また日照時間も少なく、南に隣接する小鹿川流域とともに県中部では稀な多雪地として知られる。

厳しい環境にも関わらず、適応して生息する動植物は豊富で、貴重種も数多く確認されている。また、麓から山頂まで人工林や田畑等で寸断されることなく、連続して保全されている自然林は極めて貴重である。

引用・参考文献

- ・『名勝・史跡三徳山保存管理計画策定報告書』 1991 三朝町教育委員会
- ・『三徳山投入堂参拝登山路の地質見学』 1996 本間弘次

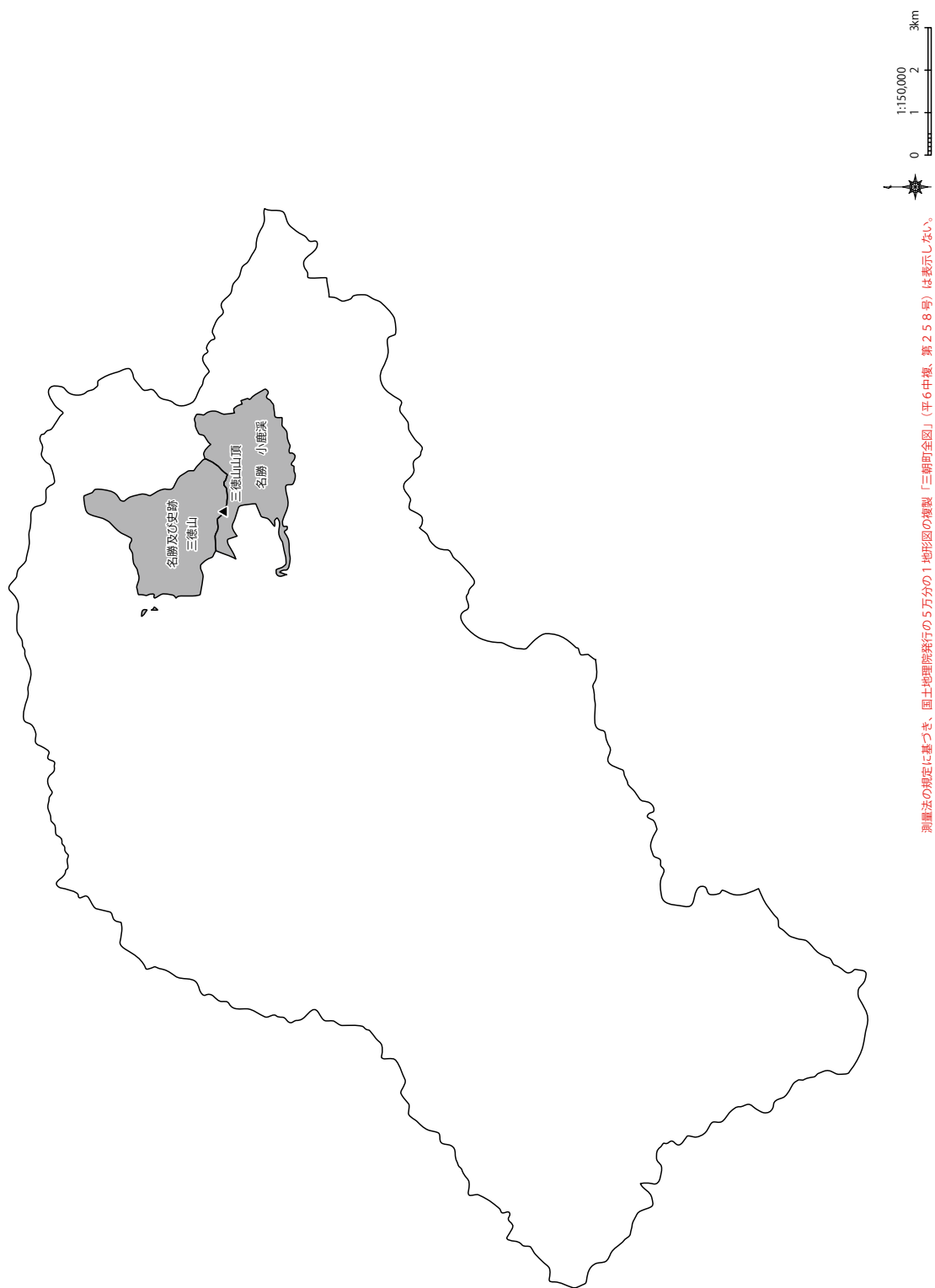


図3 三徳山の位置

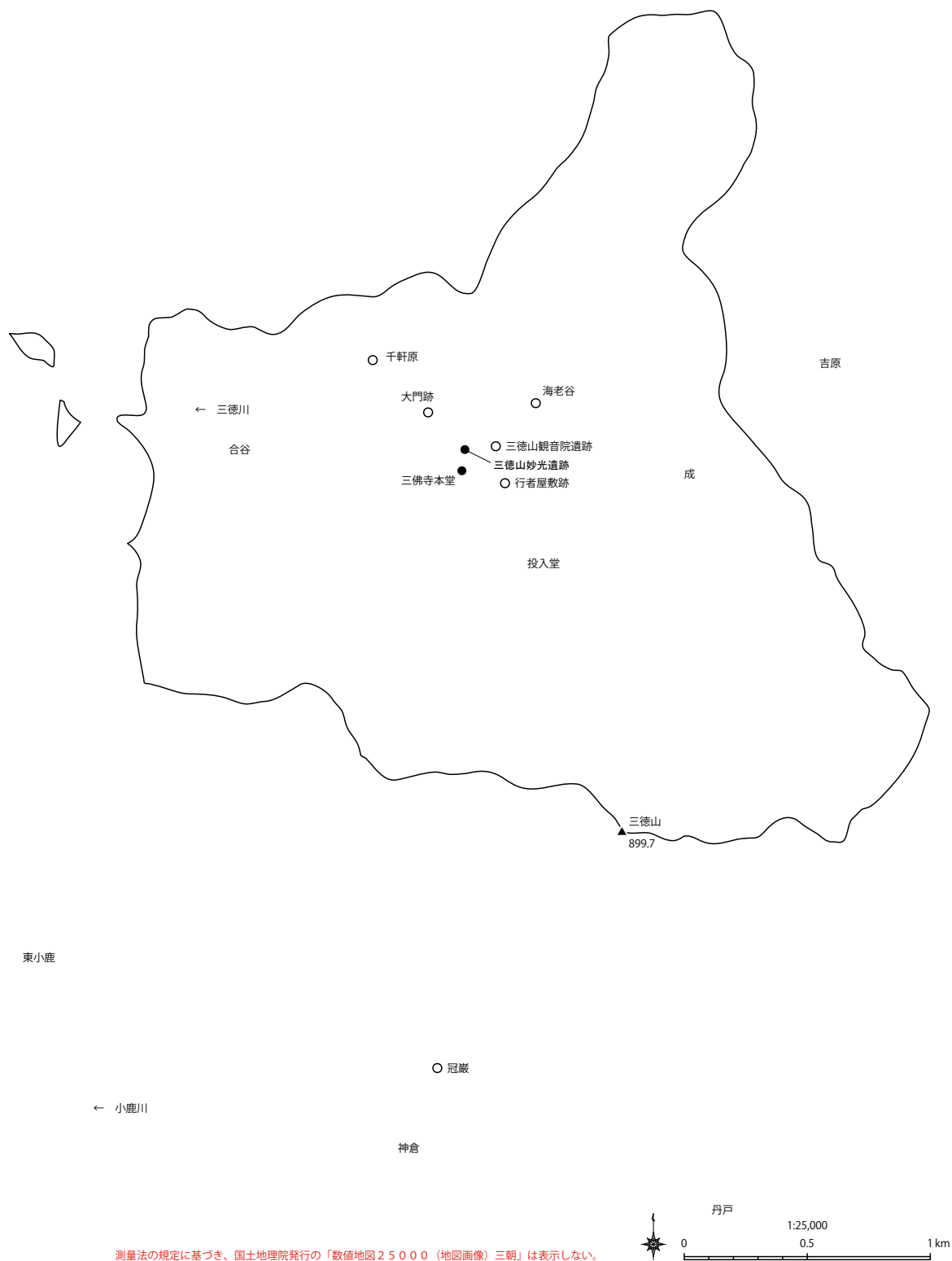


図4 名勝及び史跡三徳山指定地

第2節 三徳山の歴史的環境

1 三徳山開山と三佛寺創建

三徳山の開山は慶雲3年(706)と伝わる。修験道の開祖役行者(役小角・役優婆塞)が、仏縁のあるところに落ちるようお願い、3枚の蓮の花びらを空中に投げると、大和の吉野山、伊予の石鎚山、そして伯耆の三徳山に落ちた。そこで役行者は三徳山の絶壁によじ登り、子守・勝手・蔵王の三所権現を祀ったという。同様の説話が修験道の総本山金峰山の『金峯山草創記』にも記され、かなりの範囲で広まっていたようである。寺院の建立に先立ち三徳山が山岳信仰の霊場として開かれたことを窺わせるものとして注目される。

嘉祥2年(849)には、慈覚大師円仁が釈迦・弥陀・大日の三仏を安置し「浄土院美徳山三佛寺」と号したと伝わる。円仁創建の説話も全国いたるところにある。なお、遣唐使に随行し唐に渡っていた円仁が帰朝したのはこの2年前のことであり、同じ伯耆国にある角磐山大山寺にも円仁来山の伝説が伝わっている。いずれにしても9世紀前半には山陰各地に天台密教(台密)が伝わり、その流れの中で三徳山にも天台宗の寺院が創建されたものと考えられる。

三徳山はもともと山そのものを信仰の対象としていたが、自然の立地を巧みに活かして多くの社閤が配置された。山麓にも修行の拠点として多くの僧坊が建てられ、多数の僧侶が修行した。

重要文化財銅鏡には長徳3年(997)銘、「女弟子平山」の作者名とともに胎蔵界中台八葉院が線刻されている。古来、鏡は御神体とされ、鏡面には神が宿るとされたが、平安時代の本地垂迹思想の流行とともに、鏡面には本地である仏像が彫られるようになった。この銅鏡も、三徳山がその思想の影響を受けたことを示すものといえる。

2 中世における三徳山の盛衰

平安時代末期になると、三佛寺は天台宗の寺院として隆盛し、多数の僧兵を擁した。その力の源となったのは、中央や地元の権力者の庇護である。しかし一方で、しばしば政治的な抗争や社会の変動に巻き込まれ、衰退と再建を繰り返すこととなる。

三徳山が関与する争いの記録として最も古いものは、仁安3年(1168)、大山寺との間のものである。『大山寺縁起』には、高倉天皇即位に伴う大嘗祭への献上に関して大山寺の中門院・西明院と、南光院の間に紛争があり、三徳山の門徒が南光院側に加担したことが記されている。また、その報復として中門院・西明院側が三徳山に押し寄せ、諸堂を焼き払ったことも記されている。

なお、重要文化財木造蔵王権現立像(正本尊)の胎内に納められた造立願文にも仁安3年(1168)と記され、像の奉納も同時期とされている。平成14年に、奈良国立博物館仏教美術資料研究センター長松浦正昭氏は造立願文の研究から、正本尊像の作者を慶派の仏師康慶とする説を唱え、高倉天皇の大嘗祭への献上と、正本尊像奉納の関連を指摘している。

その後、九条兼実の日記『玉葉』には寿永3年(1184)の事として、後白河法皇の御子と称する人物が大山から三徳山に移り、平家を追討して伯耆国の半分を討ち取ったこと、東伯耆の小鴨氏が従わなかったことが記されている。

いわゆる源平の争乱により、三徳山は衰退したと思われるが、三佛寺の寺伝には建久7年(1196)に源頼朝の命を受けた佐々木盛綱により、社閤38、僧坊100余、寺領3千石が再興されたと伝わる。

鎌倉時代の末期には、三佛寺は租税の免除を図り、重要な経済基盤である「温谷別所」と「小鹿東別所」を、太政官の文書を司る小槻氏(壬生官務家)に寄進した。在地領主三佛寺の上に領家の小槻

氏が存在する形となったが、小槻氏は一定の年貢を受け取るだけであったとみられる。

鎌倉幕府滅亡から南北朝時代の動乱により、三徳山は再び衰退したと考えられるが、三佛寺の寺伝によると応安2年（1369）、足利義満によって社閣38、僧坊49、寺領2千石が再興されている。

その後、三徳山は伯耆国の守護職であった山名氏の勢力下に入ったと思われるが、この時期の動静は明らかでない。しかしこの頃、諸国の山々を巡り修行をする行者達により、多くの写経が奉納されている。遠くは豊前国から奉納に來たものがあり、自らの血を用いて写経した血書もあることから、当時の三徳山がいかに広く、また篤く信仰されていたかを物語るものといえる。

戦国時代に三徳山は戦火によりまたしても衰退したが天正5年（1577）、羽衣石城主南条元統により寺領5百石が安堵され、社閣11、僧坊12が再興された。文殊堂の須弥檀扉の金具銘には「金物之檀那南条備前守 天正八年三月吉祥日」とある。備前守は元統の叔父南条信正とされ、南条氏一族による庇護を裏付けるものである。

一方、地藏堂内部（長押）には「当山退転六年寺中野原となり申候」と慶長4年（1599）の墨書があることから、南条氏による再興の後にも、さらに戦火にあったようである。

同年、豊臣政権下の鳥取城主宮部継潤の家臣と推測される友田吉政なる人物によって寺領百石が安堵されているが、もはや往時の隆盛からは程遠い姿である。

3 藩政期の三徳山

池田光仲が鳥取に移封された翌年の寛永10年（1633）、4家老連名で寄進状が出され、寺領百石が安堵された。以降、三佛寺は池田家の庇護を受け、三佛寺側でも藩主のための祈祷等を行うようになる。なお、大山寺は幕府から朱印状を与えられ3千石が安堵されている。当初三佛寺は大山寺の支配下に置かれたが、慶安2年（1649）に光仲が東照宮を鳥取城下に勧請し、その別当寺院として淳光院（のち大雲院）を創建すると、因伯の天台寺院を総括することとなり、三佛寺もその末寺となった。

この頃の三徳山領は俵原村、井土村、門前村の3村で成り立っていたが、正善院に伝わる『年中行事』によると、この3村に対する三佛寺の支配権がある程度認められていたようである。例えば、領内ではよほどの大罪人でない限り三佛寺が裁判権を持っていたこと、宗門改以外では三佛寺の許可なく郡役が直接取り調べをすることができなかったこと、庄屋・年寄等の村役人も三佛寺が任免し、郡役にはその結果を届け出るだけであったことが挙げられる。

なお、この時期の三徳山の姿を伝えるものとして、享保19年（1734）に描かれた『美徳山三佛寺境内絵圖』（図版1 - 2）がある。

4 近代以降の三徳山

明治元年（1868）、神仏判然令が出されたが、三徳山の主要部分は鳥取藩から宮所として取り扱われていたため、大規模な破却を免れ、現在に至ることとなる。

引用・参考文献

- ・『三徳山』 1965 米田範真
- ・『名勝・史跡三徳山保存管理計画策定事業報告書』 1991 三朝町教育委員会
- ・『三徳山の歴史と美術』 2002 第17回国民文化祭三朝町実行委員会
- ・『三徳山とその周辺（改訂版）』 2005 鳥取県立博物館

第3節 三徳山における調査の経緯

1 過去の調査

三朝町が実施した三徳山における埋蔵文化財調査としては、まず三佛寺資料館建設事業及び農業構造改善事業に伴い実施された昭和62年度の三徳山遺跡発掘調査がある。調査では、三佛寺境内の資料館建設予定地（御旅所）において事前に試掘を行い、焚火や整地の跡が検出され、青磁、中近世の土師器、瓦質土器、鉄器等が出土した。調査にあたった国田修二郎氏は整地の理由を御旅所造成のためと推測している。

昭和62年度の三徳山遺跡発掘調査では農業構造改善事業に伴い三徳川右岸に位置する字九曜・九曜頭の通称「千軒原」の10箇所でのトレンチ調査も実施された。千軒原は「往古の坊」跡とされ、宝永3年（1706）には仏像などが出土したことが寛保2年（1742）の松岡布政による地誌『伯耆民談記』に記され、地名からも僧坊跡などの遺構の存在が想定されたが、土坑1基を確認したのみで、遺物の出土はなかった。先述の『三徳山地域保存管理計画』の中で鳥取県文化財保護審議会委員山本清氏は、いずれの調査地においても調査が十分尽くされたとはいえず、将来の調査において考慮すべき点を指摘している。

次に、平成4年度に農用地有効活用モデル集落整備事業に伴う三徳山海老谷発掘調査がある。海老谷は三徳川を隔て、投入堂と対面する位置にあり、かつて尼寺があったと伝わる。享保19年（1734）の『美徳山三佛寺境内絵圖』には「清涼院」と記されている。調査では遺構の検出はなく、白磁、青磁、鉄釘等の遺物が出土している。調査にあたった日野琢郎氏は出土した多数の鉄釘から、それなりの建築物が存在したとしている。

2 三徳山歴史遺産調査

平成13年度から『環境整備基本計画』の策定と並行して「三徳山歴史遺産調査」を開始した。この調査は三徳山の文化財や自然の価値を調査し、広く周知・啓発することで、後世まで守り伝える活動の契機とするため関係機関の協力を得て実施しているものである。

主な調査としては、平成13・14年度の建造物と仏像を対象とした年輪年代調査がある。この調査は奈良文化財研究所古環境研究室長光谷拓実氏が中心となって実施された。年輪から木材の伐採年代を科学的に特定するこの調査により、従来は建築様式から推定されるのみであった投入堂の建立時期について、平安時代後期であることが確定した。一方、木造蔵王権現立像（正本尊）については、これまでも納入願文の解読により奉納の時期を仁安3年（1168）とする研究があったが、光背の測定結果がこれとほぼ合致する1165年であり、文化財の歴史的価値が文献と科学的調査の双方によって証明された貴重な成果となった。

また、平成13～15年度には奈良国立博物館仏教美術資料研究センター長松浦正昭氏による仏教美術品調査が実施された。木造蔵王権現立像（正本尊）について、前述の納入願文の未解読部分を解読することによって、その作者が慶派の仏師「康慶」とする説が導かれた。正本尊像に関してはさらにX線撮影によって内部に3枚の文書と参籠札が残されていることも判明した。さらに、重要文化財銅鏡と同寸、同紋様の白銅鏡が中国の浙江省博物館に所蔵されていることが判明し、現地調査等によって確認を行った。大陸との文物交流の歴史を考える上で貴重な資料となった。

平成15年度以降には、埋蔵文化財調査にも着手し、古文書や絵図、小字名等から遺構の存在が想定される場所の調査を実施した。

平成15年度には、行者道の途中にある平坦地の調査が実施された。この場所は『美徳山三佛寺境内絵圖』に「行者屋敷」として記されている。調査は行者道中にある平坦地（第1トレンチ）と、谷を隔て南側に位置する平坦地（第2トレンチ）で行われた。その結果、第1トレンチからは溝や土抗、第2トレンチからは柱穴跡などの遺構が検出され、16世紀後半ごろのものと思われる陶磁器類や、土師器、鉄製品などの遺物が出土した。特に、第1トレンチ出土の備前焼の大甕は生活に用いる水を貯める水甕と考えられ、ここに存在した建物は行者たちの修行の拠点として機能した可能性が高いといえる。一方、出土した陶磁器類のうち、特に染付や白磁などは中国景德鎮産で、当時庶民が日常に使用しない奢侈品であることから、調査にあたった濱隆造氏はこの地域を支配していた南条氏との関連を指摘した。

平成16・17年度に、三徳川右岸の千軒原へ続く斜面に位置する「大門」と呼ばれる石柱の調査が実施された。大門については『伯耆民談記』に山門跡として「大なる石」の記述がある。平成16年度の第1次調査によって、南北2列の列石と、道の痕跡が検出され、永楽通寶1点が出土した。さらに平成17年度の第2次調査によって、第1次調査で検出した道の下に、別の古い道が検出された。これらの遺構から、石柱は何らかの境界として機能したと推測される。永楽通寶は明の永楽帝の時代、西暦1411年に鑄造が始まり、室町時代中期には貿易を通じて日本にも輸入された。日本で作られた私鑄銭も流通したが、出土した永楽通寶は字体等から中国での鑄造品である。国内での流通は寛永通寶に駆逐される17世紀中ごろまでに限定されるため、この遺跡の年代はそれ以前とみられる。

平成17年度には、大門跡調査と並行して、県道拡幅工事に先立つ事前の試掘調査が6箇所で行われ、三佛寺東方の三徳川左岸に位置する平坦地において、新たに遺跡が確認された（三徳山観音院遺跡）。調査の結果、建物の礎石が検出され、同じ層から鉄釘や鎧の部品（小札）など100点を超える鉄製品と、少量の炭化物などが出土した。この場所には何らかの建物が存在し、火災により消失したのと考えられる。また、さらに下層から近世の大鍛冶のものとみられる炉壁が廃棄された状態で見つかった。付近に鉄の加工を行う施設があったものと思われる。

平成19年度には三佛寺本堂の保存修理事業に伴う発掘調査の予備調査として、周辺のトレンチ調査を実施し、土層堆積等の確認を行った。また、並行して三徳山南麓に位置する神倉を中心に、三徳山関連遺構分布調査が実施され、冠巖付近に三徳山の祭祀に関する遺跡が確認された。

引用・参考文献

- ・『三徳山遺跡発掘調査報告書』 1988 三朝町教育委員会
- ・『名勝・史跡三徳山保存管理計画策定事業報告書』 1991 三朝町教育委員会
- ・『三徳山海老谷発掘調査報告書』 1993 三朝町教育委員会
- ・『三徳山の歴史と美術』 2002 第17回国民文化祭三朝町実行委員会
- ・『三徳山地域保存管理計画「環境整備基本計画」報告書』 2003 三朝町教育委員会
- ・『三徳山行者屋敷跡発掘調査報告書』 2004 三朝町教育委員会
- ・『名勝及び史跡三徳山大門跡発掘調査報告書1』 2005 三朝町教育委員会
- ・濱隆造「日中鸚鵡文銅鏡の比較 - 三仏寺所蔵鏡と浙江省博物館所蔵鏡 - 」
『調査研究紀要』1 2006 鳥取県埋蔵文化財センター
- ・『名勝及び史跡三徳山発掘調査報告書』 2006 三朝町教育委員会
- ・『名勝及び史跡三徳山発掘調査報告書Ⅱ』 2008 三朝町教育委員会

第2章 三佛寺本堂発掘調査

第1節 調査に至る経緯と概要

1 三佛寺建造物群修理の経緯

三徳山の建造物は繰り返し修理が行われてきた。最古の記録は附の棟札によって明らかとなっている永和元年（1375）の投入堂修理である。以来、近世までは主に領主によって修理されてきた。近代以降は、大正4・5年の国指定建造物修理（大正の大修理）をはじめ、三佛寺が主体となり、文化庁等行政の補助を受けて修理が行われた。

平成10年代に入ると、三徳山の建造物の腐朽が目立ちはじめ、修理が課題として認識されるようになった。平成15年3月策定の『環境整備基本計画』には建造物修理の方針が盛り込まれた。その策定過程で各建造物の調査と価値の再評価が進められ、町指定であった不動堂、元結掛堂、観音堂、鐘楼堂、十一面観音堂と、未指定であった本堂は県指定となった。

個々の実情により変更はあるが、基本的には『環境整備基本計画』の方針に基づき修理が実施されることとなり、平成15年度から「平成の大修理」と銘打つ大規模な修理が三徳山開山1300年祭記念事業として実施されている。平成15～18年度は、「国宝三仏寺奥院ほか3棟保存修理事業」（国庫補助事業）としてすべての国指定建造物の修理が実施された。この修理の経過は同事業の報告書に詳しいので割愛する。また、一部並行する形で、平成18年度から「保護文化財三徳山三仏寺建造物群（鐘楼堂ほか）保存修理事業」（県補助事業）として県指定建造物の修理が実施されている。平成18年度は鐘楼堂及び不動堂の修理が実施された。

2 三佛寺本堂修理の経緯

本堂の修理については、計画当初から関係者の苦慮するところであった。屋根の腐朽に伴い雨漏りが発生するなど、建物自体の状態が深刻であることに加え、地盤沈下が発生し、北側の石垣が変形していたため、これらの修繕を含む大規模な工事となる可能性があったためである。屋根の腐朽状況から修理は緊急を要するため、平成18年の完了を目指した修理の実施が検討されていた。

修理に向けた各種調査の一環として、地盤の状況を確認するため、本堂北東側と南西側の2箇所ではボーリング調査が実施された（平成16年1月）。その結果、本堂北東側の地下3～4m付近に空隙が確認された。当初は平成18年の完了を目指し修理の実施が検討されたが、平成18年10月に予定されていた三徳山開山1300年記念法要で本堂を使用する必要があると、空隙の処理について検討する時間的余裕がないことから、平成18年完了を断念し、記念法要の後に工事着手することとされた。屋根の腐朽については修理までの間、トタン葺きによる応急処置を施ししのぐこととなった。

その後、地盤の状態をより詳細に確認するため、本堂北東側を中心とした電気探査と、3箇所での追加ボーリング調査が実施された（平成17年8月～11月）。その結果空隙は本堂北東側地下に脈状に発達していることが明らかとなり、成因は東にある樋口谷からの水害等に伴う伏流水と推測された。また、本堂地盤の北側半分程度が盛土であること、石垣変形の原因は盛土部分の圧縮沈下によるもので、上部が南側に倒れ込んでいるものの現状で安定していることが示された。これを受け、協議の結果「保護文化財三徳山三仏寺建造物群（鐘楼堂ほか）保存修理事業」の一環として、平成19年度から本堂修理が実施されることとなった。

3 調査に至る経緯

地質調査の結果については、考古学的手法による再検証が必要と認識され、修理に先立ち地下遺構の確認も必要であることから、三朝町教育委員会が発掘調査を実施することとなった。

平成19年度には本堂周辺2箇所でのトレンチ調査を実施した（9月3日～10月17日）。第1トレンチは本堂東側の投入堂への参拝受付所前、第2トレンチは三佛寺の宝物殿南側である。

調査によって本堂地盤周辺の土層堆積を確認し、本調査に向けて貴重な資料を得ることができた。

まず第1トレンチでは本堂が立地する地盤の造成時の地表面を確認することができた。また、土層堆積状況の観察によって、造成地盤の沈下と、その沈下分を埋める形での応急的な修復を確認した。造成後に堆積した土層は比較的薄く、また天保10年（1839）の本堂再建以前に遡りうる遺構の検出や遺物の出土はなかった。また、地下空洞に関連する遺構等の検出もなかったことから、空隙が地盤造成後に地表面から掘り込まれた遺構である可能性はなくなった。

第2トレンチでは石垣構築後に水害により堆積した可能性がある土層を確認した。この層は、地下空洞の成因を水害による伏流水とする推定を裏付けるものといえる。

4 調査の経過と方法

本堂解体後の平成20年度に、本堂直下の調査を実施した。現地での調査期間は平成20年7月23日～11月4日である。名勝及び史跡三徳山の指定地であるため、調査は文化庁長官から現状変更の許可を得て実施したが、準備作業や掘削を伴わない調査については許可に先立ち実施した。

まず礎石等の調査を実施し、次に基壇上面の調査を行い、遺物の取上げと遺構等検出の後、遺構に影響のない範囲でトレンチ調査を実施した。第1・第2トレンチは北東側の陥没箇所にT字となるよう設定し、第3トレンチは基壇中央部を南北方向に貫くよう設定した。

掘削は全て手掘りである。掘削に伴い発生した排土については、比較的大きな岩石を分別した上ですべて土のうに詰め、基壇外の地面に仮置きした。遺構及び遺物の記録にあたっては一部トータルステーションを利用し、細部や土層断面等の記録は手測りで実施した。写真撮影は35mmのモノクロネガフィルム及びカラーリバーサルフィルムを基本とし、必要に応じて6×7判のモノクロネガフィルム及びカラーリバーサルフィルムでも撮影を行った。また、活用を見越して適宜デジタルカメラでの撮影も行った。調査終了時には前述の排土を土のうから取り出し、埋め戻して原状に復帰した。

土層情報を補足する目的で、サンイン技術コンサルタント株式会社への委託によりボーリング調査を実施した（平成20年12月1日～平成21年1月30日）。

さらに、岡山大学名誉教授本間弘次氏のご指導をいただき基礎石の石質の概要を確認することができた（平成21年7月29日）。

5 調査体制

調査主体	三朝町教育委員会			
	教育長	徳田洋輔	教育総務課長	大丸満壽
	教育総務課次長	石原伸二	指導主事	藤原彰二
	主幹	西田寛司	副主幹	矢吹幸久
調査指導	副主幹	山根幸恵	主任	柚垣大作
	鳥取県教育委員会			
	文化財主事	濱田竜彦		

第2節 三佛寺本堂の概要

1 立地

三佛寺本堂は三徳川左岸に形成された段丘上の三佛寺境内に立地する。

この段丘には三佛寺をはじめとして現存する寺院施設が集中しており、本堂の敷地はその最南端に位置する。本堂付近の標高は約320mである。

南側と西側は急斜面であり、東側は樋口谷を経て投入堂へと続く行者道の起点となっており、北側は石垣を挟んで宝物殿敷地（御旅所）と接し、さらに下段には各院の境内が続く。

2 建築様式

三佛寺本堂は、天保10年（1839）に鳥取藩主池田斉訓により再建された宝形造の仏堂である。向拝1間、唐破風付き、桁行5間半、梁間5間である。

平成14年12月20日付で山上の不動堂・元結掛堂・観音堂・鐘楼堂・十一面観音堂とあわせて一括で鳥取県の保護文化財三徳山三仏寺建造物群に指定されている。

やや縦長だが宝形造の建物で、全体に木柄が太い。正面3間の中央間取りを実寸法の3間幅で背面まで通し、背面に仏壇を構える。脇間取りは1間幅で、後2間に小部屋をつくる。内部空間を広くとる構成は他に類例のない形式で、特異な本堂である。

身舎は、外回りの組物を舟肘木とし、内部の組物も出三斗に留めるなど、装飾も少なく比較的小さなしいが、唐破風造の向拝は、虹梁や臺股を彫刻で賑々しく飾り立てている。

背面には弘化2年（1845）奉納の三朝町指定保護文化財三仏寺本堂俳諧額（題「美徳山奉額四季発句抜章三百吟」）が掲げられている。

3 解体修理に伴う発見

前回の屋根修理からおよそ60年が経過し屋根をはじめとして腐朽が進み、地盤沈下の影響も大きいことから、平成19年度から、建物をすべて解体して組みなおす大掛かりな修理が行われている。

本堂の解体に伴って、天保10年再建を裏付ける墨書が確認された。

さらに、現在柿葺となっている屋根が、建立当初は木賊葺（一部栃葺）であったことが判明するなど、貴重な発見があった。

引用・参考文献

・和田嘉宥、生田昭夫「三徳山三仏寺の諸堂宇について」

『日本建築学会中国支部研究報告集』26 2003 社団法人日本建築学会

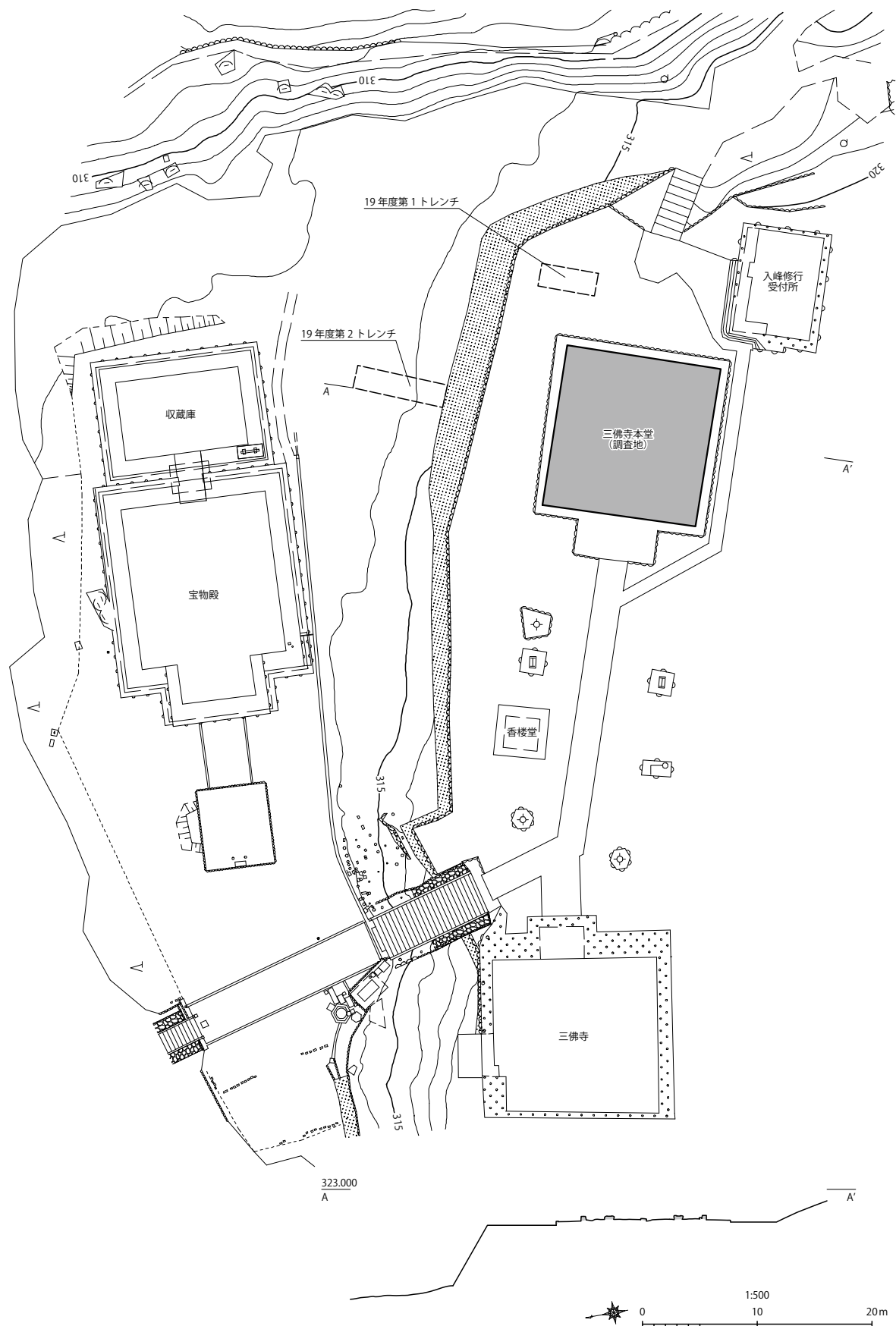


図5 三佛寺本堂周辺地形

第3節 調査の目的と課題

1 調査の目的

調査の目的は、本堂の解体修理にあわせ、地下遺構の有無の確認を行うことである。

より具体的には、現本堂にともなう礎石と地下遺構などの確認と、天保10年（1839）の現本堂再建以前に存在したはずの前身本堂に関する情報を得ることを目指した。

また、土層から地盤造成に関する情報を得て、本堂敷地の形成過程を明らかとすることも目的である。

2 調査前に得られた情報

調査前の段階で、ボーリング調査と電気探査の結果により、水害等が成因とみられる空隙が地下にあること、地盤北側が造成されたものであることが判明していた。基壇北東側には空隙に関連すると見られる陥没が確認できた。

また、先に触れたとおり、平成19年度には予備調査を行った。予備調査では、2箇所（本堂東側・北側石垣下段）でトレンチ調査を行い、造成土上面までの土層堆積と地盤沈下の状況を確認することができた。

3 文字資料

事前に文献や石碑等から得られた情報は次のとおり。

- | | | |
|---------------|------------|-------------|
| ① 貞享5年（1688） | 棟札 | 藩主池田綱清造営と記載 |
| ② 享保19年（1734） | 美徳山三佛寺境内絵圖 | 前身本堂が描かれる |
| ③ 寛方2年（1743） | 本堂前石灯籠1 | |
| ④ 寛延2年（1749） | 本堂前石灯籠2 | |
| ⑤ 文化12年（1815） | 本堂前石碑 | 「石垣再建立」とある |

①の本堂と②に描かれた本堂が同じものかどうか、また現在の位置と同じ位置にあったものか不明だが、天保10年の再建以前に前身の本堂が存在したことは明らかである。

また、本堂敷地と、北側に隣接する宝物殿敷地（御旅所）との間には現在石垣があるが、②を見ると境界が不明瞭で、一体であるように見える。この描写が正確であると仮定すると、現在の本堂敷地は②以降に造成された可能性がある。

第4節 礎石の調査

1 礎石等の状態の確認

まず、本堂解体後見ることができるようになった基礎の状態を確認した。

柱を支える礎石は8つあり、北東側から順に番号をつけた。そのほか束石や縁束石などの基礎石が存在している。

2 礎石上面の墨打と墨書

8つある礎石のうち礎石1・2・4の3つの上面に、柱の位置決めのためと思われる十字の墨打ちと、「四寸〇〇」、「九寸〇〇」などと書かれた墨書を確認した。

3 礎石の石質

目視による分類であり、組成分析等を行っていないため厳密な分類ではないことを断っておく。

	石 質	備 考
礎石1	斑状安山岩	
礎石2	斑状安山岩	
礎石3	玄武岩質安山岩	班晶がある。坂本安山岩と比べ板状節理が弱い。 三明寺産のものとよく似ている。
礎石4	斑状安山岩	
礎石5	斑状安山岩	斑状輝石か。斜長石の大きな班晶が目につく。
礎石6	斑状安山岩	
礎石7	斑状安山岩 または 礫質安山岩	軽石を含む溶岩餅。このあたりでは珍しい。 班晶が大きく多い。
礎石8	玄武岩質安山岩	
束石	斑状安山岩 玄武岩質安山岩 花崗岩	玄武岩質安山岩のもの2、花崗岩のもの1がある。 花崗岩のものはこのあたりの河原の石と推測される。
縁束石 土台石 葛石	凝灰岩 または 凝灰角礫岩	

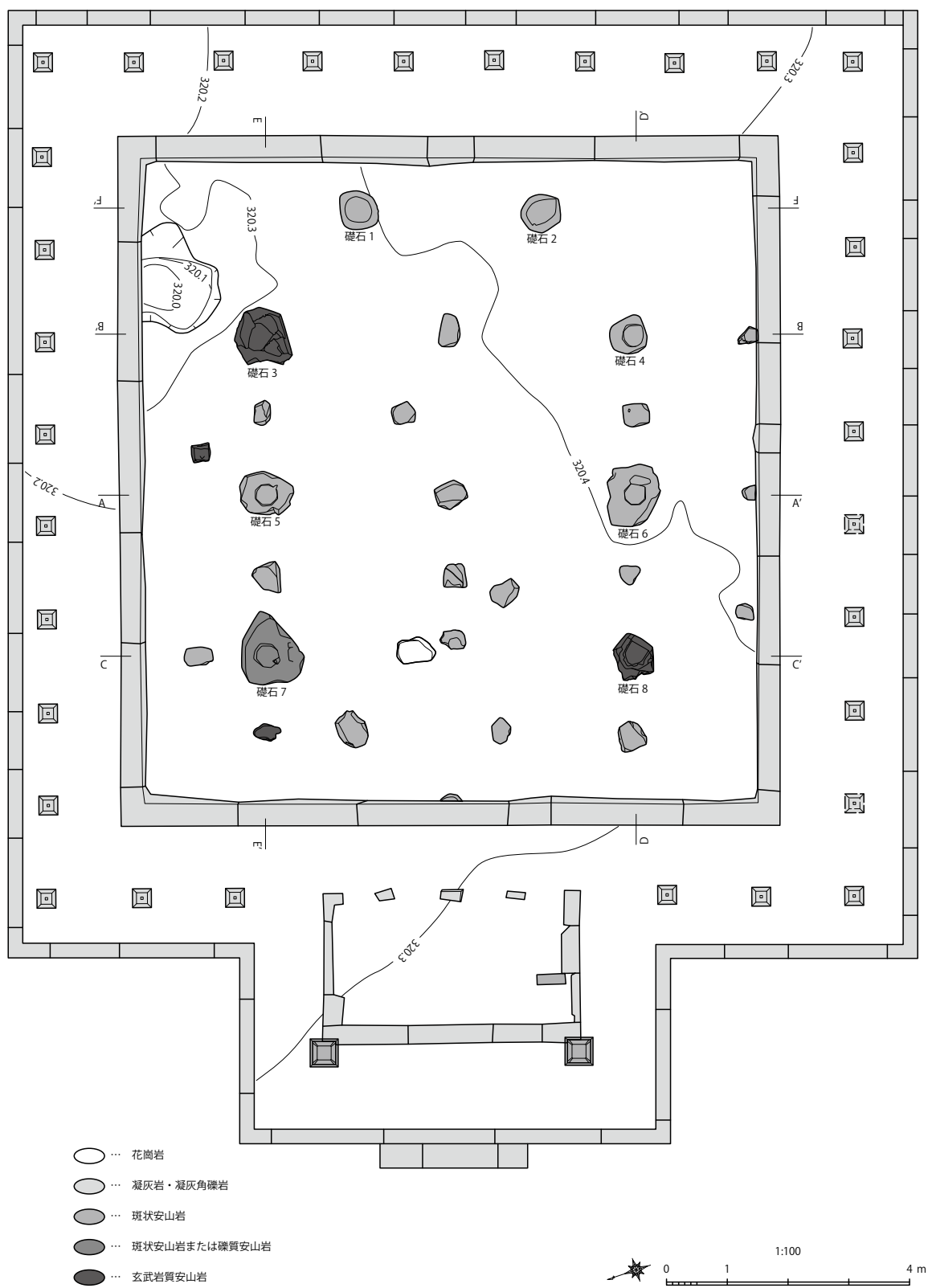


図6 基礎石の配置

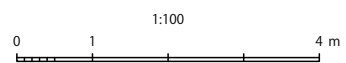
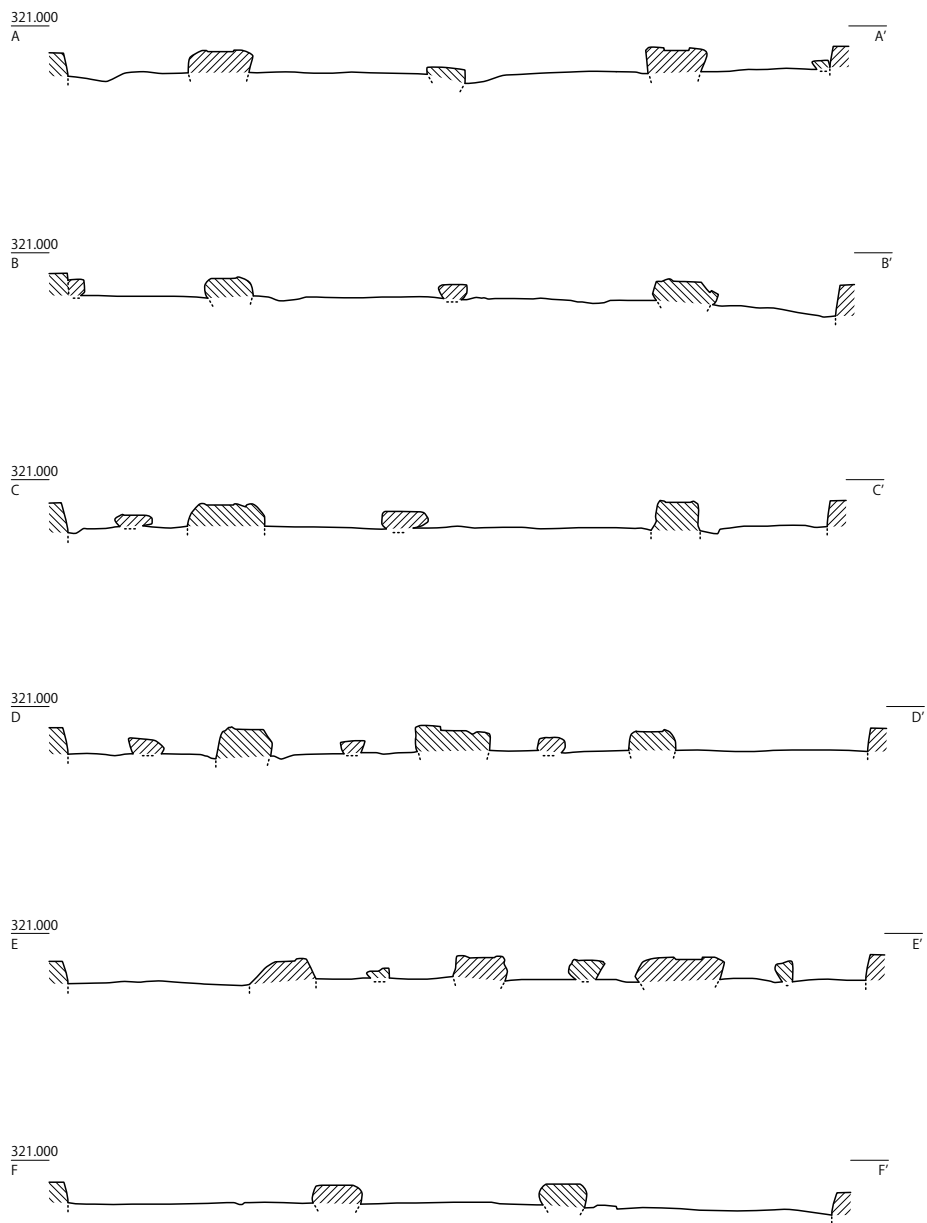
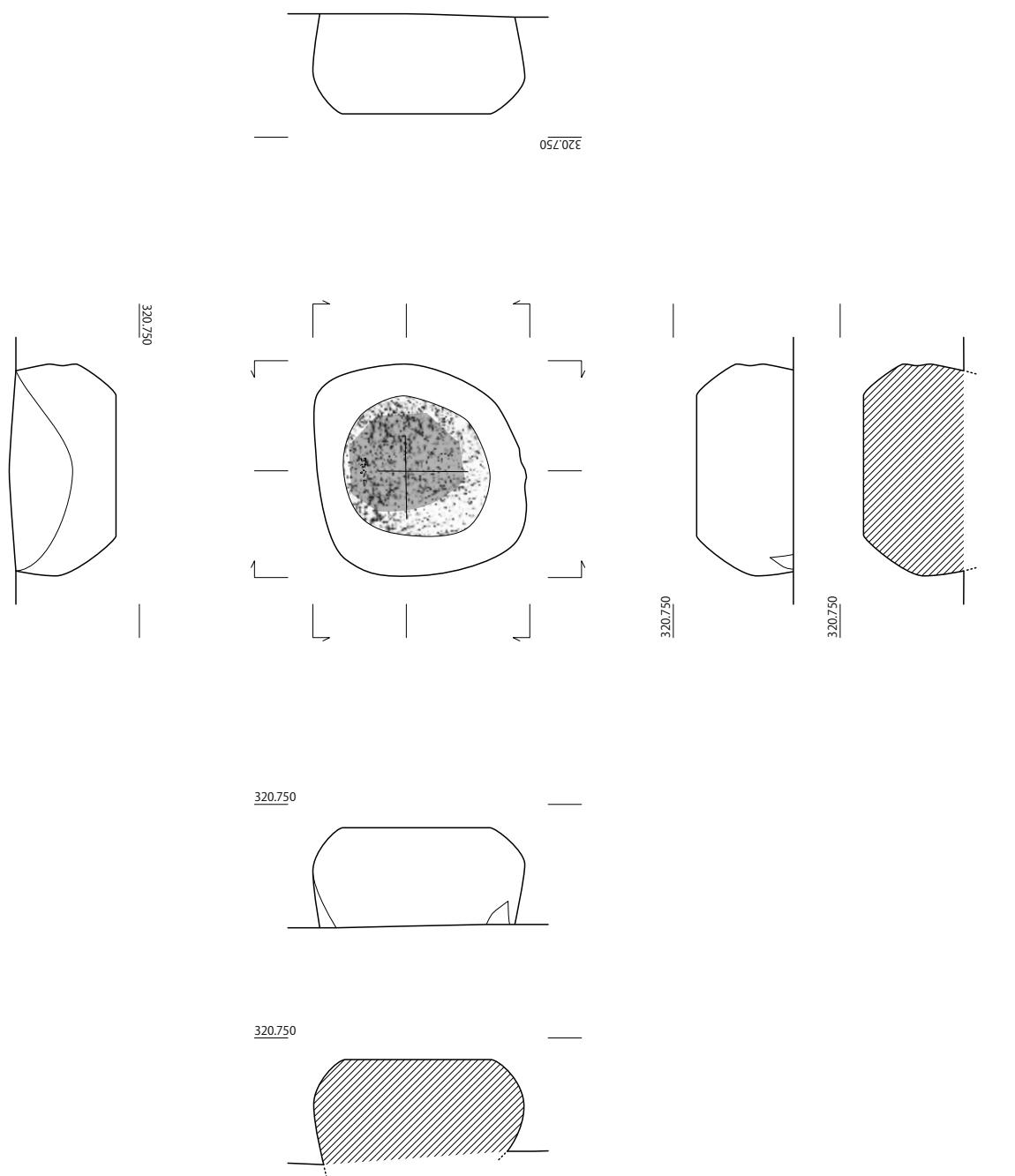


图7 基础石断面



● ... 柱痕跡

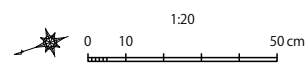


図8 礎石1

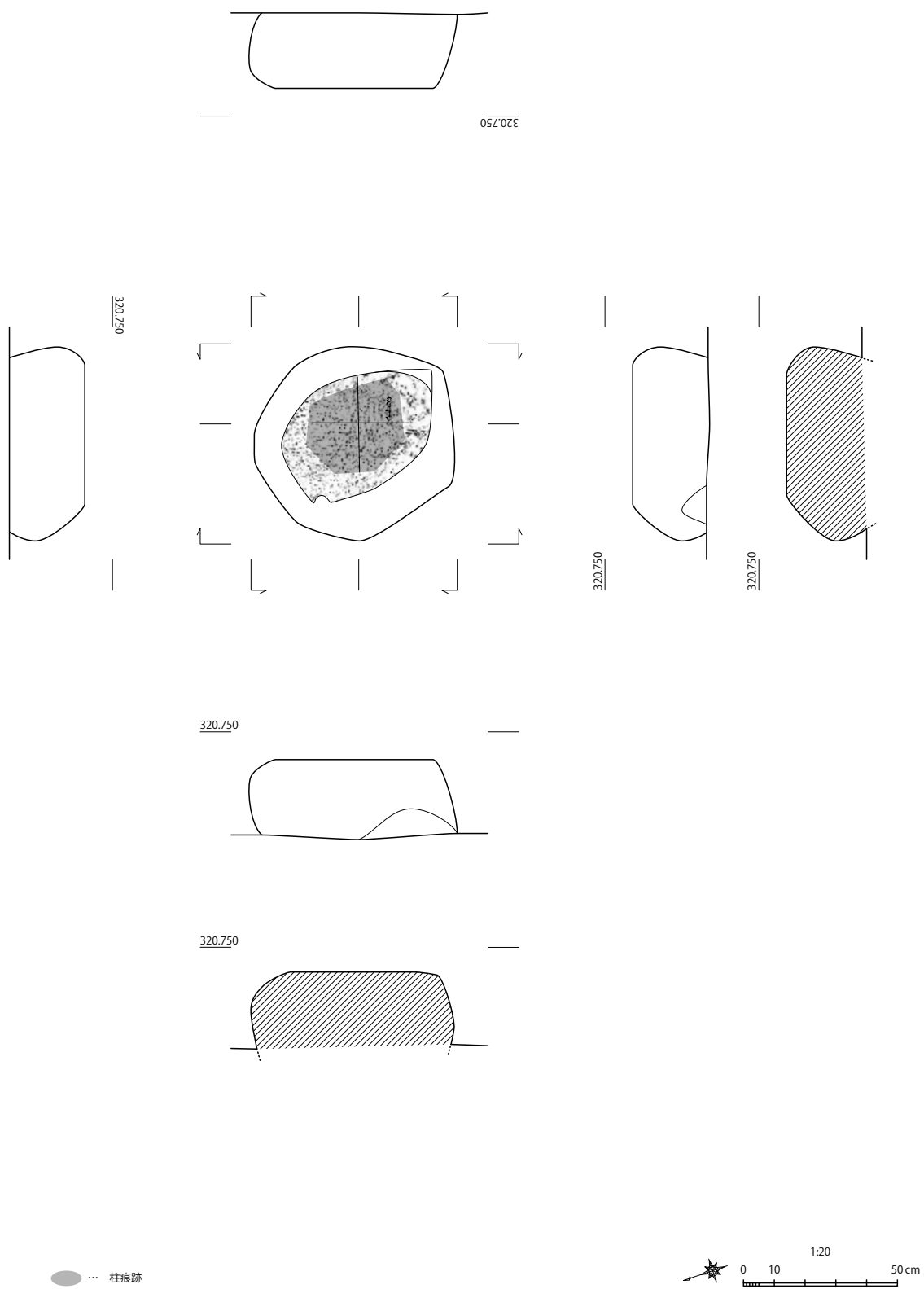


图9 礎石 2

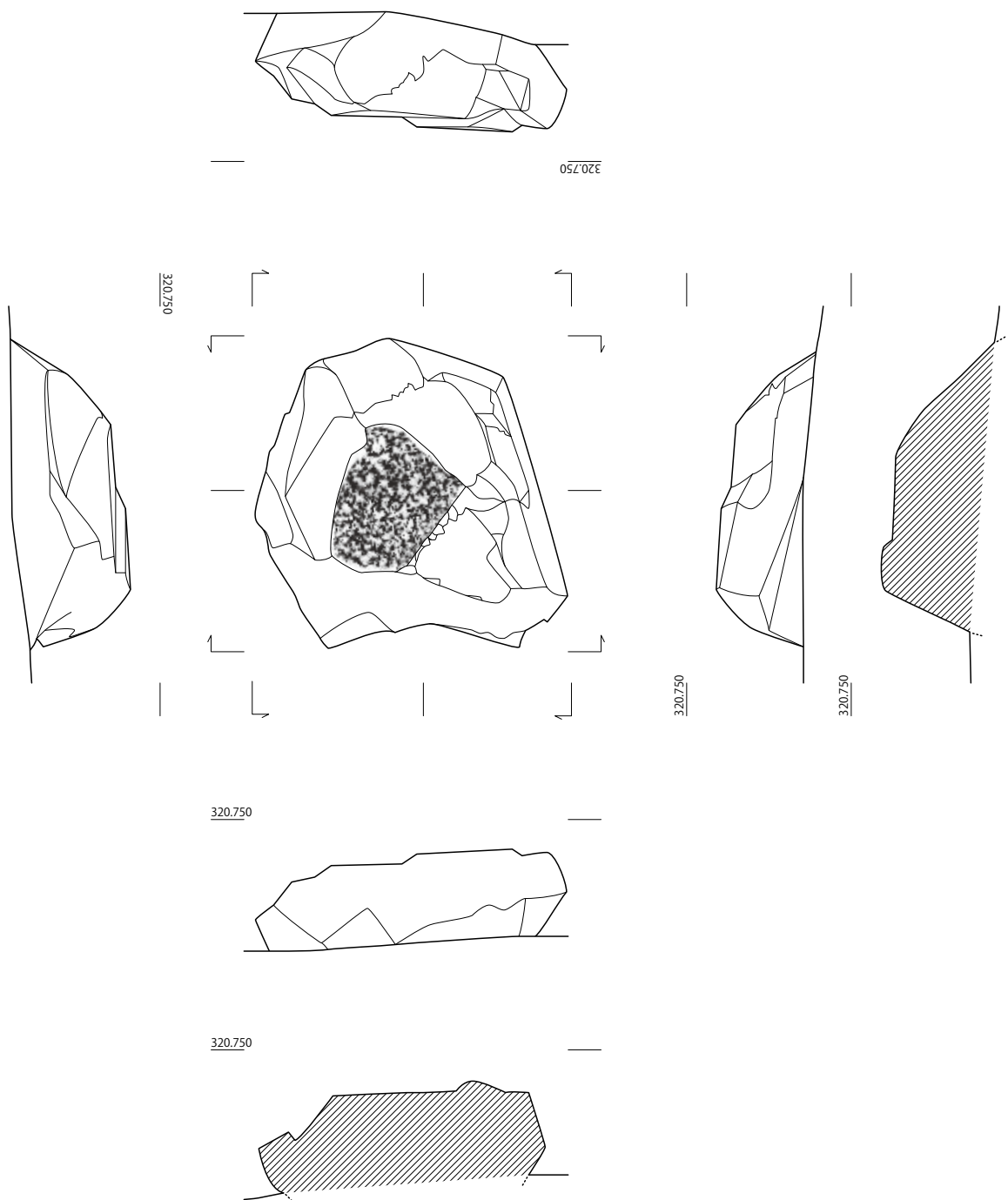
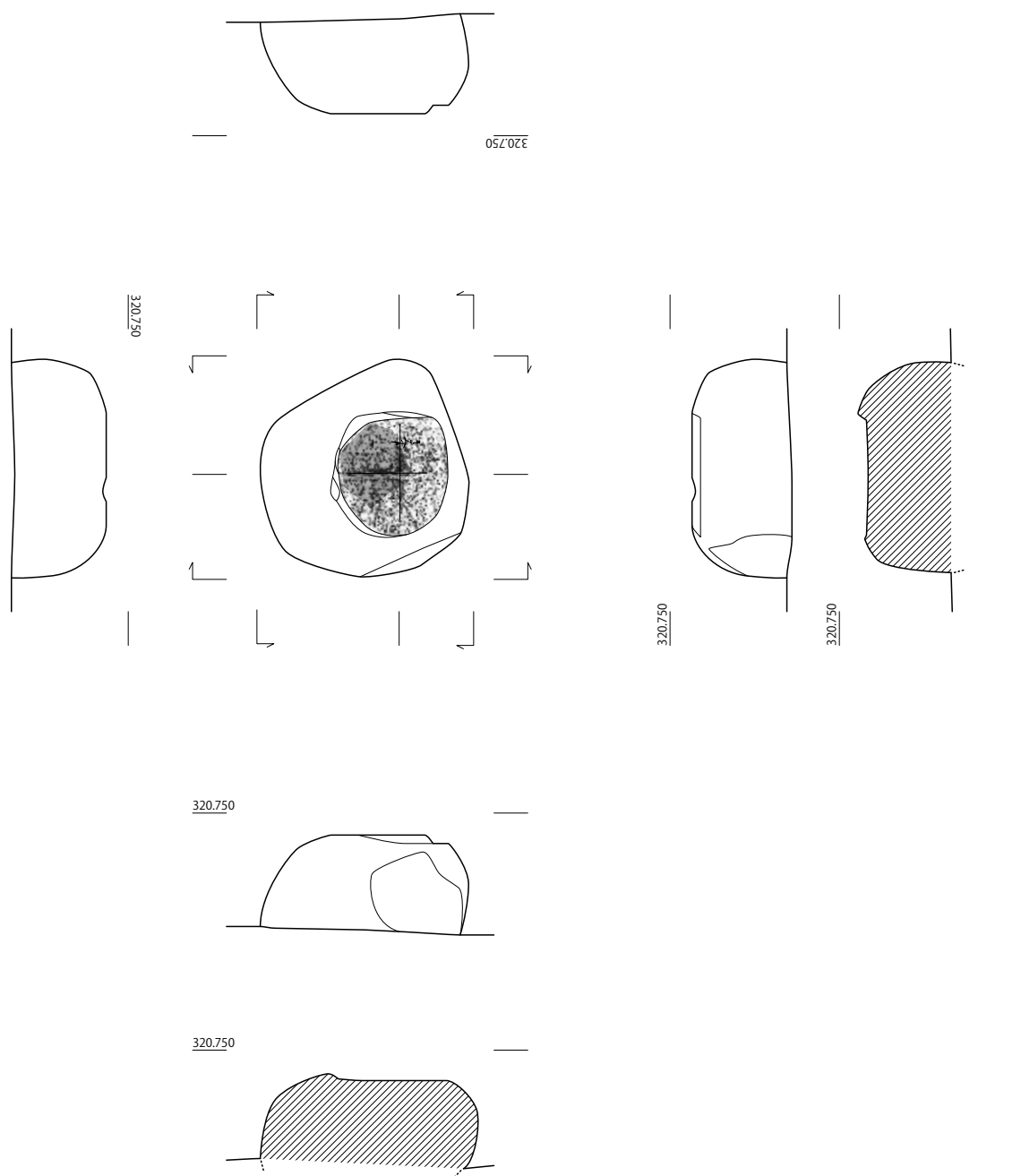


図10 礎石3



● … 柱痕跡

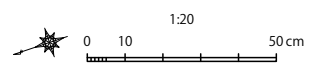
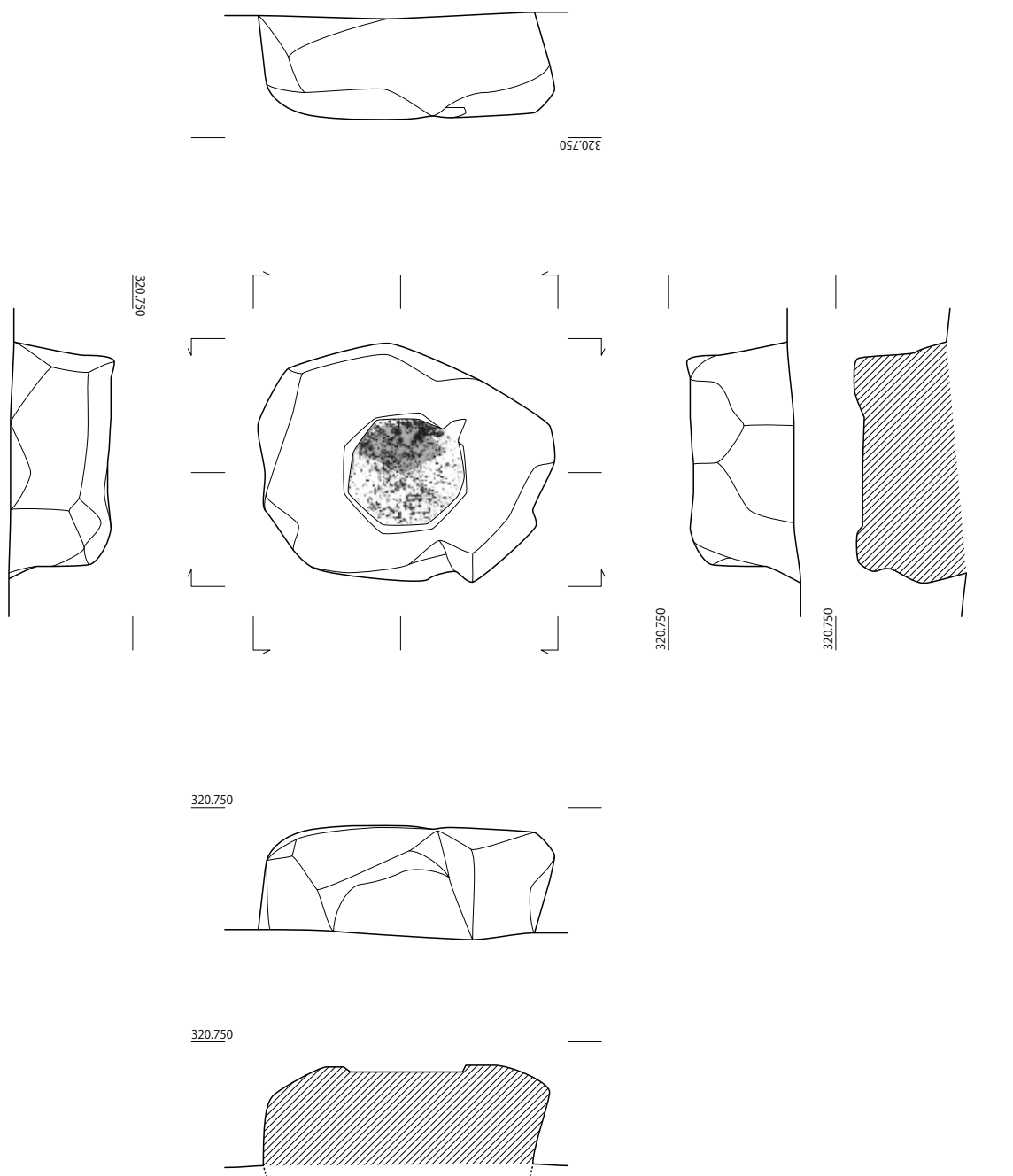


图11 礎石 4



... 柱痕跡

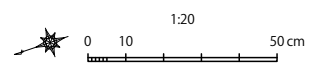


图12 礎石5

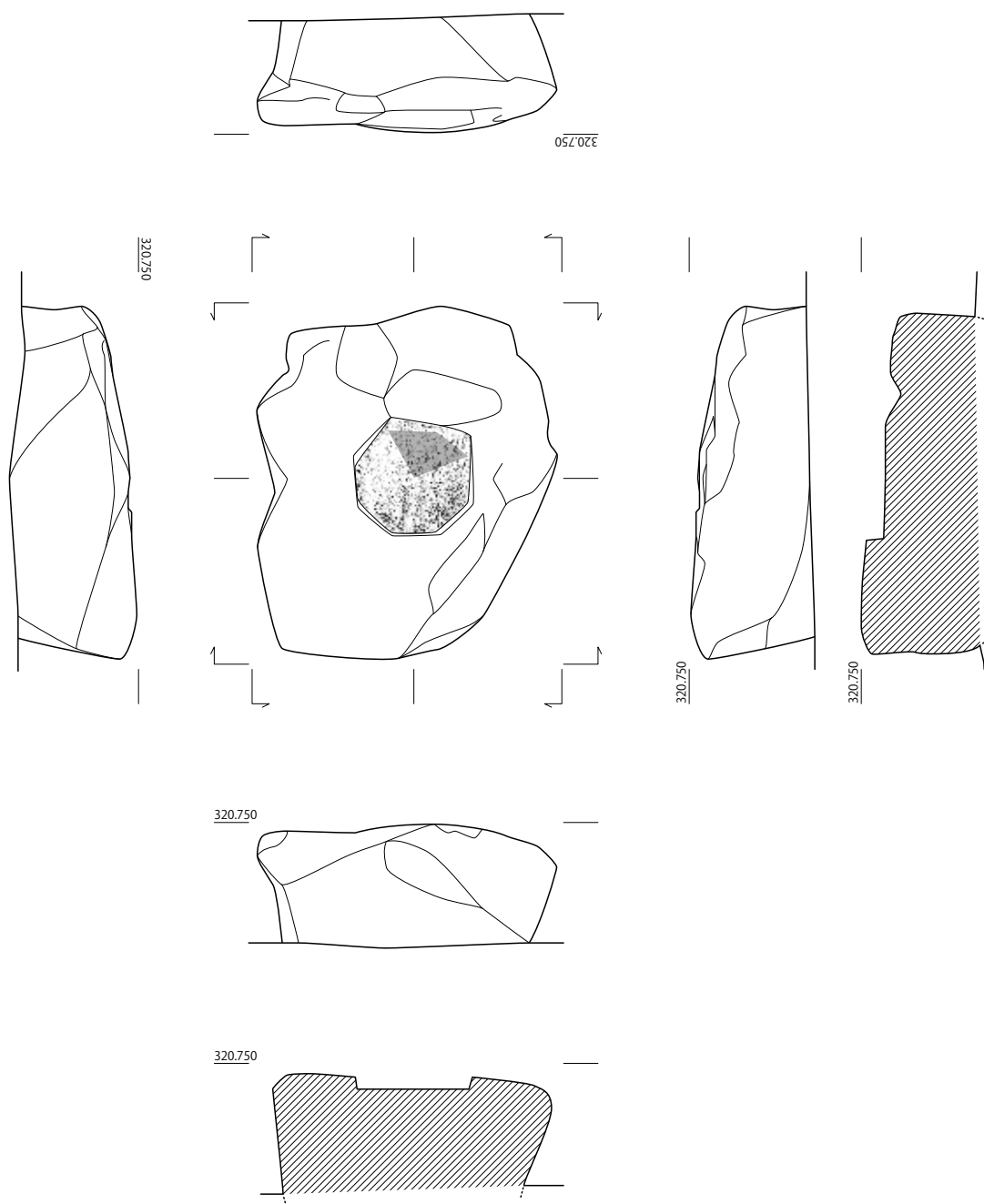
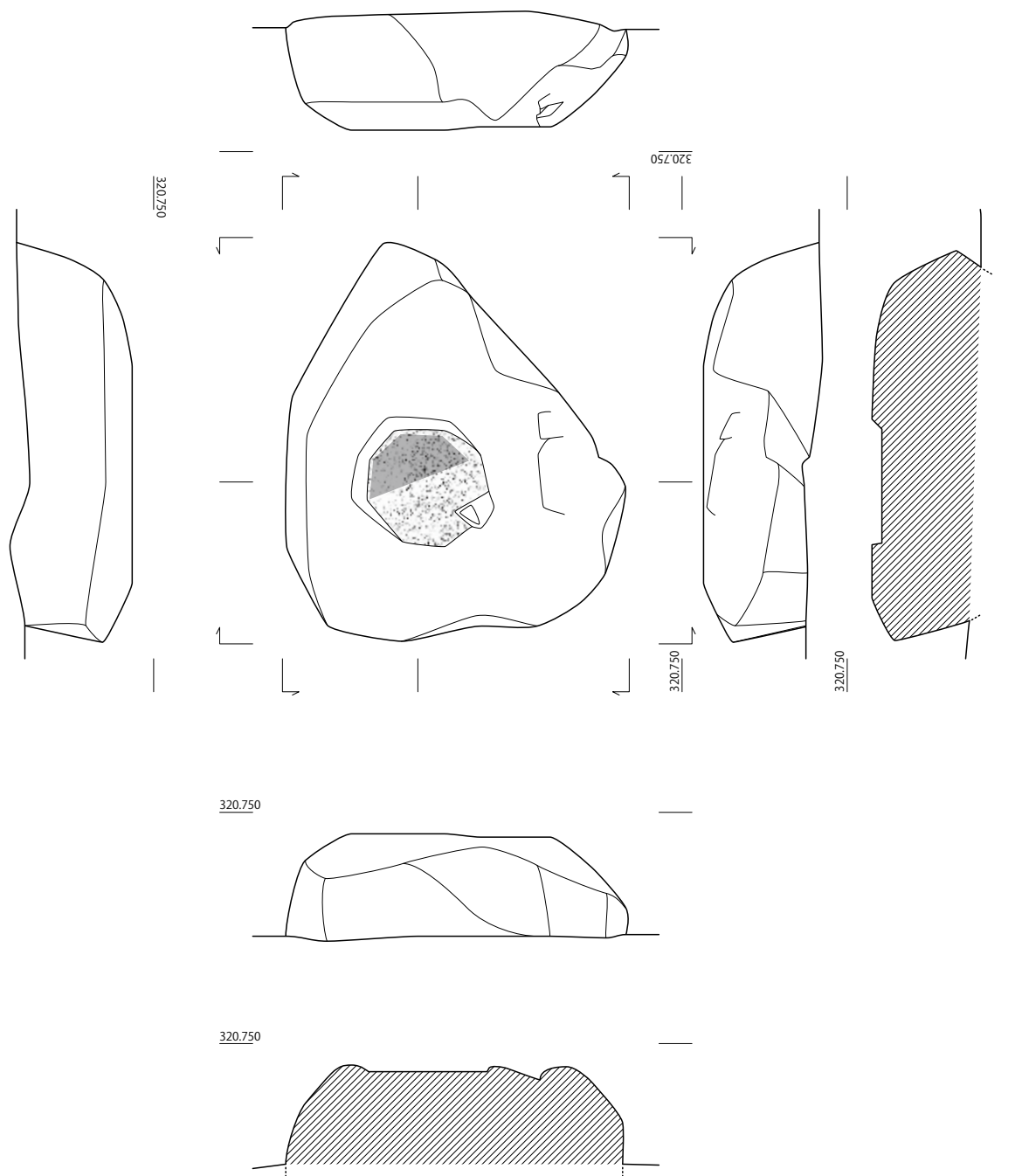


图13 礎石6



● ... 柱痕跡

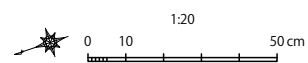


図14 礎石7

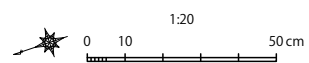
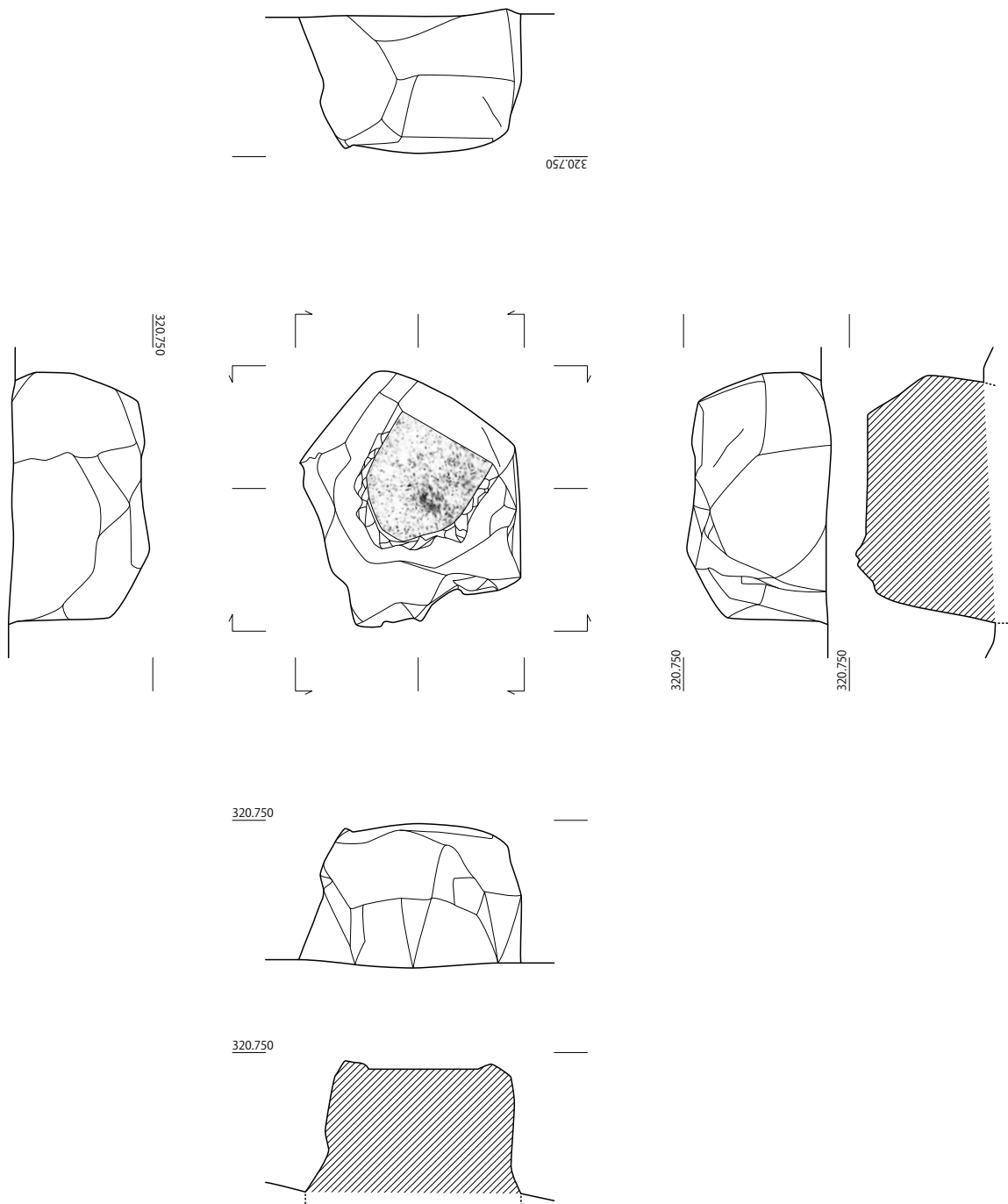


图15 礎石 8

第5節 基壇上面の調査

1 概要

21箇所で焼土、23箇所でピットまたは土坑、3箇所で油の染みを検出した。いずれの遺構も現本堂建立時か、それ以降のものである。一部の土坑は礎石や地覆石を据え付けるための掘り込みと思われるが、その他の遺構は大きさや分布に規則性がなく、性格については不明である。

2 検出した遺構

SF 1～21は焼土である。うちSF 2・5～8・10・11・13・15～17・20では炭化物が見られる。本堂の祭祀に関係した儀式的跡である可能性もあるが、大きさや配置に規則性がなく、時代もわからないことから、性格は不明である。

P 1～20はピットである。こちらも分布に規則性を見出しがたく、性格は不明である。

SK 1～5は土坑である。SK 1は礎石8の、SK 2は束石の、SK 3～5は土台石のそれぞれ据付穴である。このほかの礎石・束石にも地下に据付穴があると考えられるが、基壇上面に露出し確認できるものはこれだけである。土台石の据付穴は場所により露出している部分とそうでない部分があると思われる。これは、基壇造成にあたって、表面の仕上げが均質でなかったか、または本堂建立後現在に至るまでに、部分的に基壇表面の土が剥ぎ取られるような事情があったものと考えられる。

SX 1～3は油の染みである。

3 出土遺物

近世から近代の銭貨を中心とする111点の遺物が出土した。

銭貨は計66点であり、内訳は天聖元寶1点、寛永通寶の銅銭が31点、寛永通寶の鉄銭が9点、近代のものが25点である。

天聖元寶(No.3)は宋銭である。北宋の第4代仁宗が、天禧6年(1023)に改元して天聖元年とした際に銭貨の改鑄を行い鑄造を開始したもので、輸入され日本でも流通した。天保10年(1839)の本堂再建以降にも用いられたものである。字体には真書と篆書の2種類があるが、出土したものは真書である。

寛永通寶は銅銭と鉄銭がありいずれも1文銭である。古寛永4点(No.35・58・71・107)を含む。

近代のものも含め、これらの銭貨はすべて寶銭と見てよいであろう。

ほかの出土遺物としては陶磁器5点、鉄製品6点、銅製品2点、瓦7点、タイル25点である。

陶磁器には染付(No.6)や完形の灯明皿2点(No.15・98)が含まれる。

また、銅製品(No.66・68)は本堂の部材(金具)と思われる。

瓦とタイルは最近のものである。

これらの遺物はすべて天保10年(1839)の本堂再建の後にもたらされたものと考えられる。

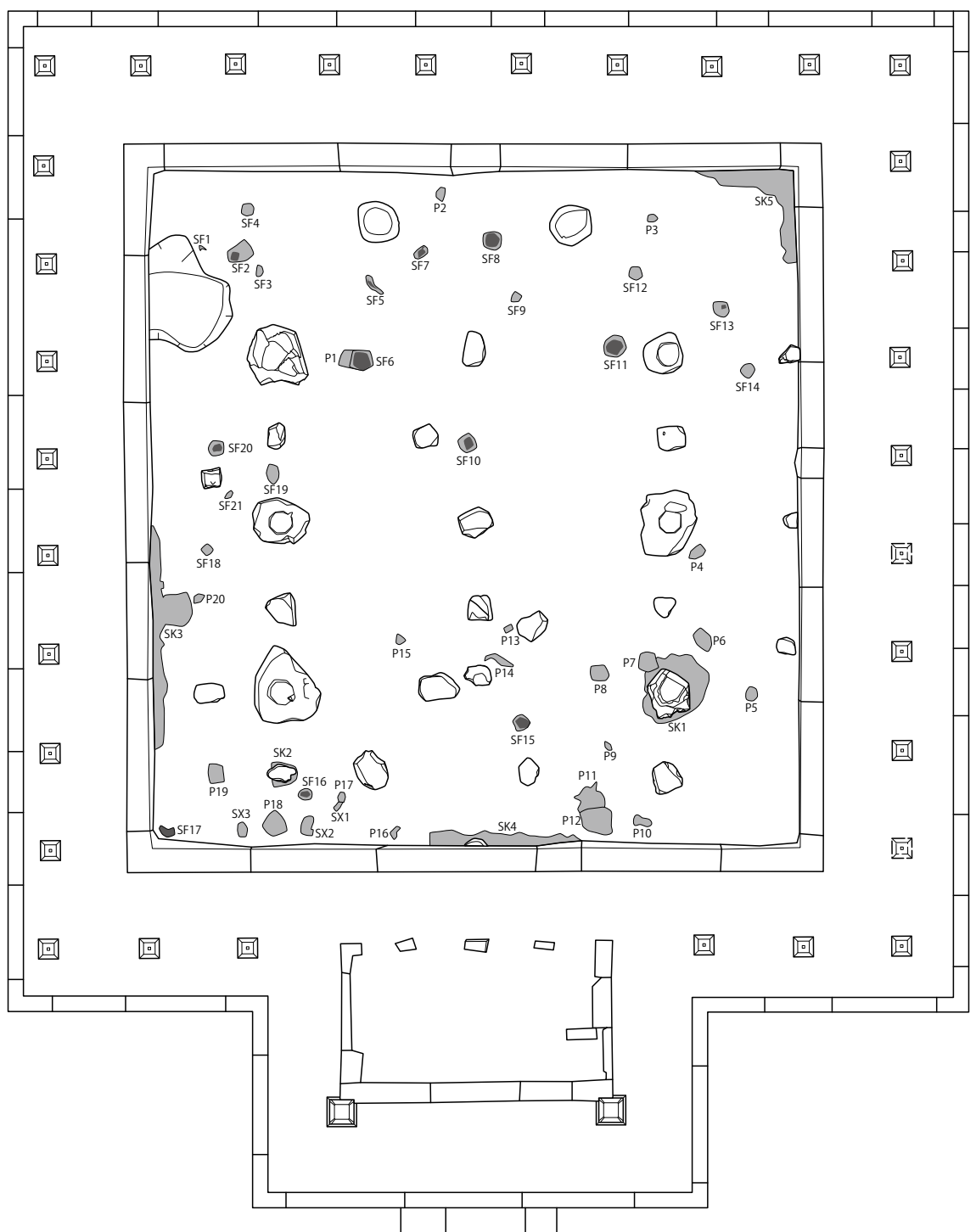


図16 遺構の分布

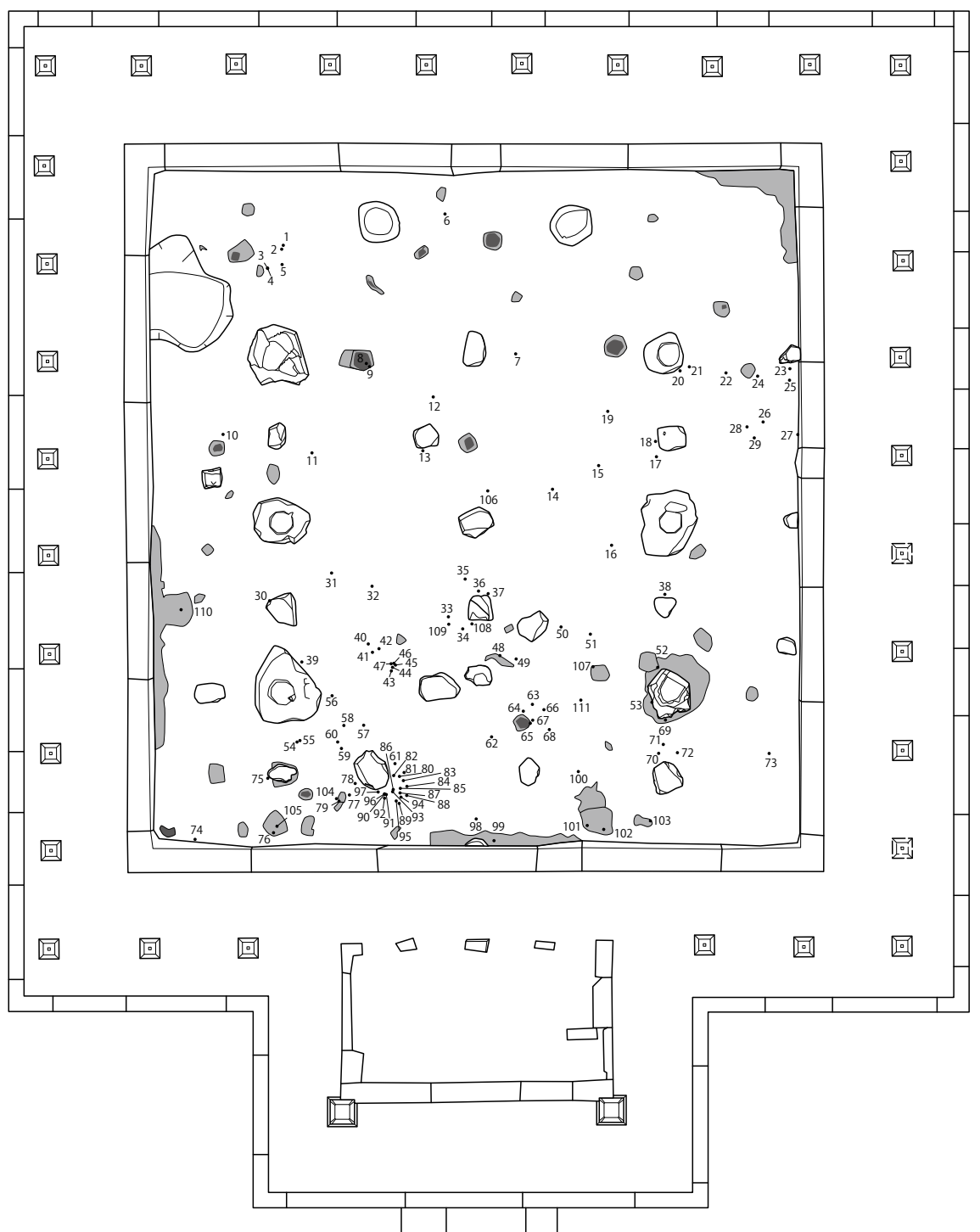


図17 遺物の分布

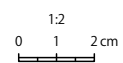
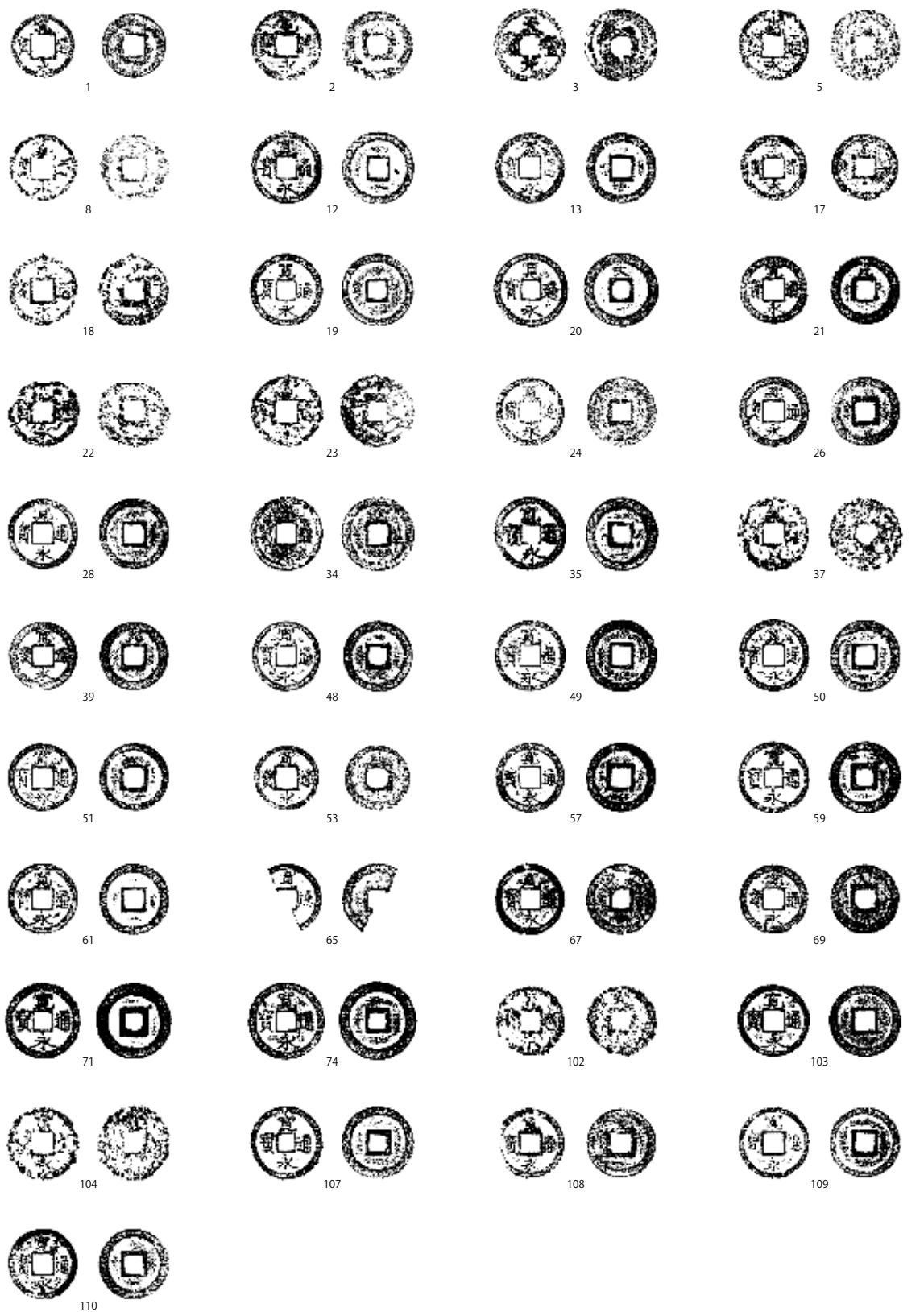


圖18 出土錢貨（一部）

第6節 トレンチ調査

1 概要

遺構に影響のない範囲で、トレンチ調査を実施した。

トレンチは3箇所を設定した。第1トレンチと第2トレンチは北東側陥没箇所にてT字となるよう設定した。第3トレンチは遺構や礎石を避け、基壇中央部を南北方向に設定した。

第1トレンチは掘削開始後すぐに遺構を検出したため、その検出面で掘削を止めた。

第2トレンチは約90cm掘り進んだ段階でトレンチ壁面等が不安定となり、崩落の恐れが出てきたため、安全を優先しやむを得ず掘削を止めた。

第3トレンチでは比較的安定している南側で掘削を進め、南端で地山を確認することができた。

2 層序

図20・21のとおり。

第1層は基壇上面を覆っている叩き土で、土間のように非常に硬く衝き固められている。

第2層は土台石の据付穴の埋土であるが、場所によっては第1層の中に挟まれる形となっている。これは第1層を衝き固める途中据付穴を掘り込み、土台石を据え付けて第2層の土で埋め、最終的に再度第1層の土で表面を仕上げたものであろう。この結果、土台石の据付穴は部分的にしか検出できなくなったものと考えられる。

第3層～第10層はすべて造成土で、どの層も礫や玉石が多く含まれる。特に第6層以下では締まりがなく間隙が非常に多くなっている。事前のボーリング調査や電気探査で確認された地下の空隙は、これらの層の状態が1つの原因となっているものと思われる。

第11層は造成土ではなく地山（段丘堆積物）である。この地山は北側に向かうにつれて急激に落ち込んでいるため、第3トレンチの南端でのみ確認できたが、北端付近ではかなりの深度となることが予想される。このことから、本堂敷地の造成はかなり大規模であったとすることができる。

3 検出した遺構

第1トレンチにおいて、土台石の据付穴であるSK6・7を検出した。

なお、土台石の下に根石は据えられていない。土台石は掘り込んだ穴の底の土に直接据え付けられている。

4 出土遺物

いずれのトレンチにおいても遺物は出土しなかった。

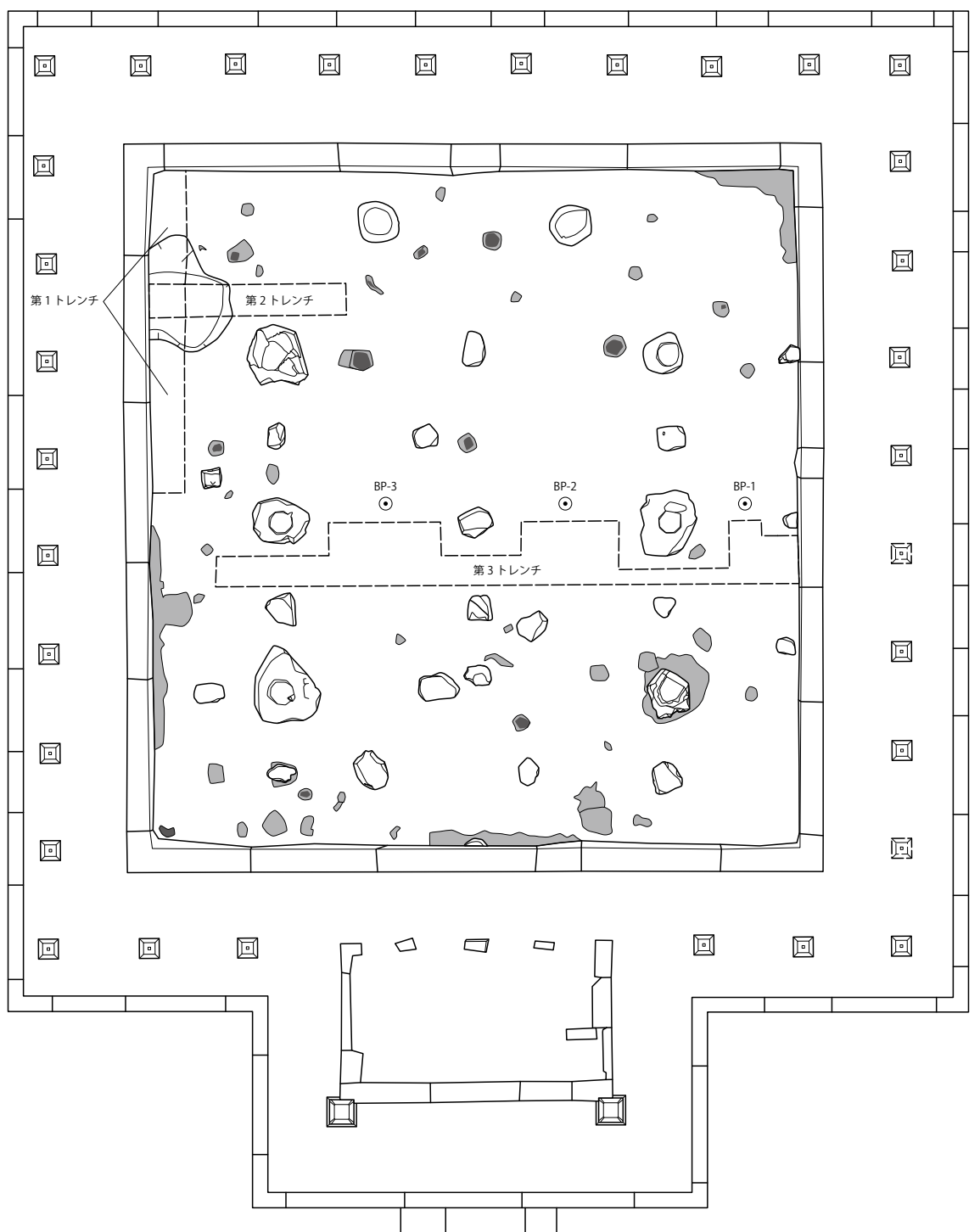


図19 トレンチ及びボーリング地点の配置

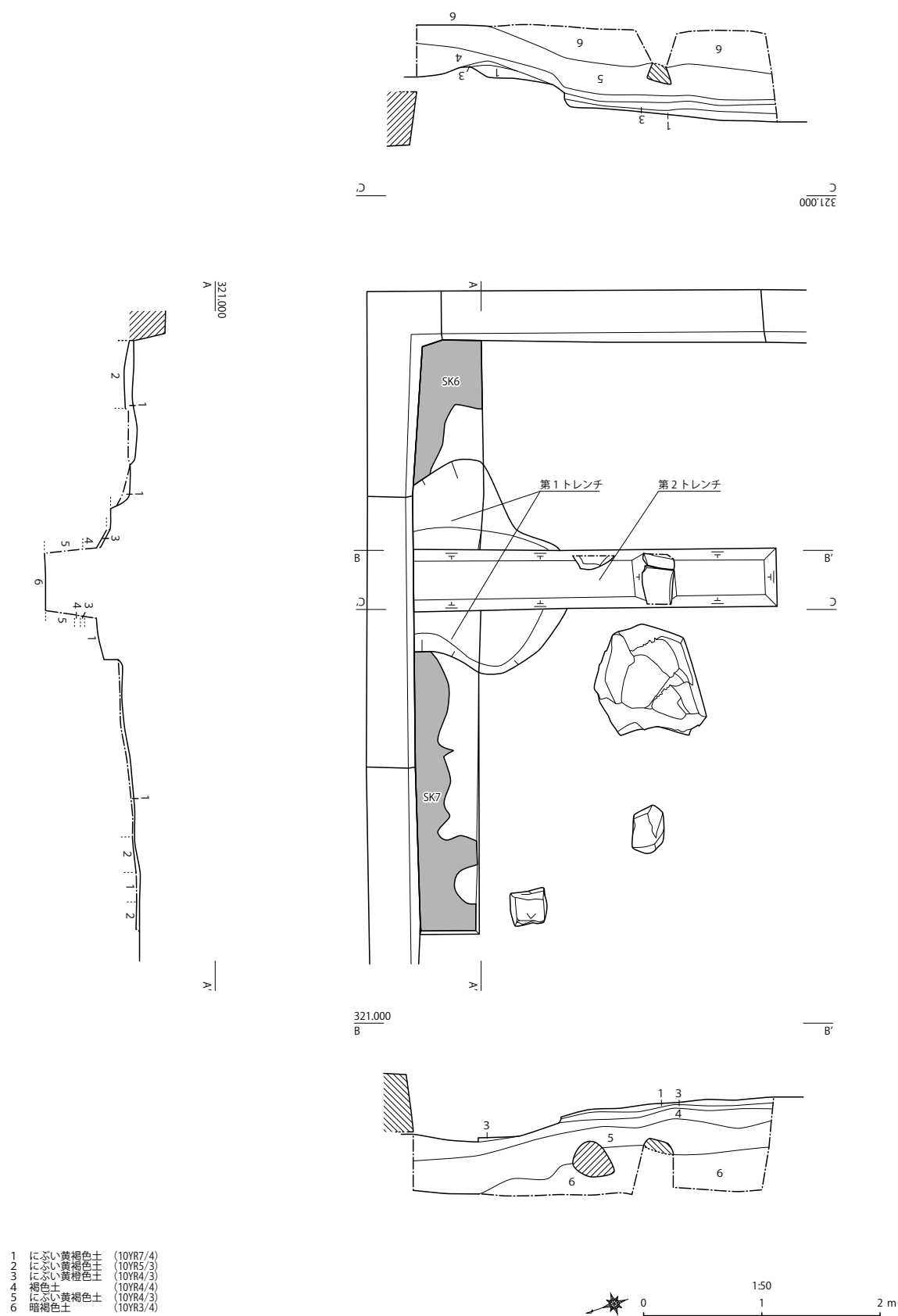


図20 第1・第2トレンチ

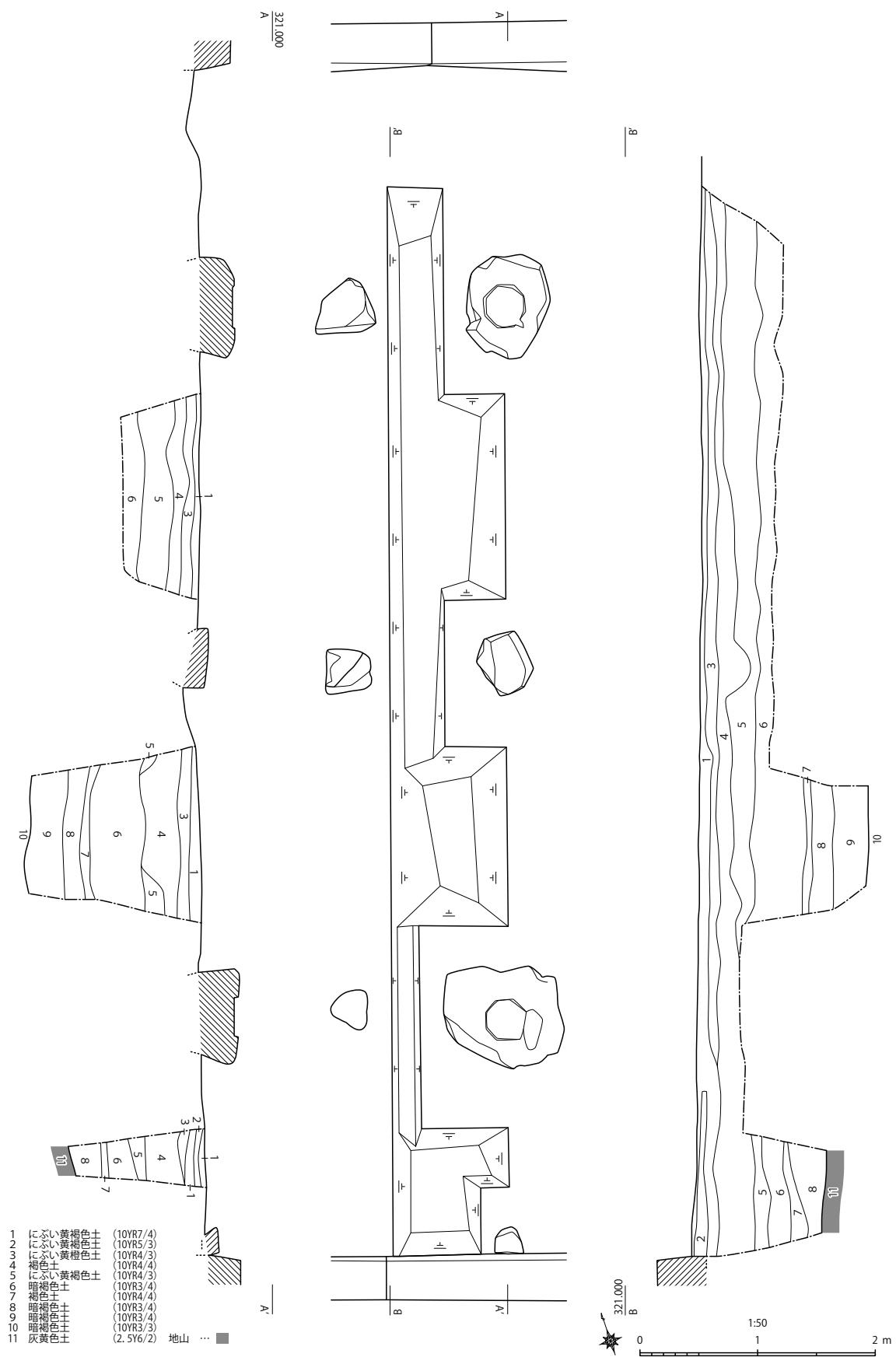


図21 第3トレンチ

第7節 ボーリング調査

1 調査の結果

調査孔は南側から順に2m間隔でBP - 1、BP - 2、BP - 3である。

- BP - 1 ①GL0.00m～-1.50m：礫混り砂質粘土（盛土）／茶褐
- ・粘土質の盛土層で、Φ5～200mm程度の礫～玉石を含む。
 - ・含水は極小で乾燥状態。
- ②GL-1.50m～-5.00m：玉石混り粘土（段丘堆積物）／茶褐
- ・人頭大（Φ200～300mm）の玉石を多く含み、間隙に茶褐色で粘性の強い砂質粘土を挟む。
- BP - 2 ①GL0.00m～-1.50m：礫混り砂質粘土（盛土）／茶褐
- ・粘土質の盛土層で、Φ5～200mm程度の礫～玉石を含む。
 - ・含水は極小で乾燥状態。
- ②GL-1.50m～-5.00m：玉石混り粘土（段丘堆積物）／茶褐
- ・人頭大（Φ200～300mm）の玉石を多く含み、間隙に茶褐色で粘性の強い砂質粘土を挟む。
 - ・GL-1.00以深で逸水100%を確認しており、空隙が大きいと考えられる。N値は深度方向に大きくなる。
- BP - 3 ①GL0.00m～-2.40m：礫混り砂質粘土（盛土）／茶褐
- ・粘土質の盛土層で、Φ5～200mm程度の礫～玉石を含む。
 - ・含水は極小で乾燥状態。
- ②GL-2.40m～-5.10m：玉石混り粘土（段丘堆積物）／茶褐
- ・人頭大（Φ200～300mm）の玉石を多く含み、間隙に茶褐色で粘性の強い砂質粘土を挟む。
 - ・GL-1.00以深で逸水100%を確認しており、空隙が大きいと考えられる。N値は深度方向に大きくなる傾向である。
- ③GL-5.10m～-6.00m：安山岩（基盤）／灰
- ・安山岩質火山屑岩。max300mm程度で棒状に採取され、N値50以上（貫入不能）と非常に密な状態を示す。

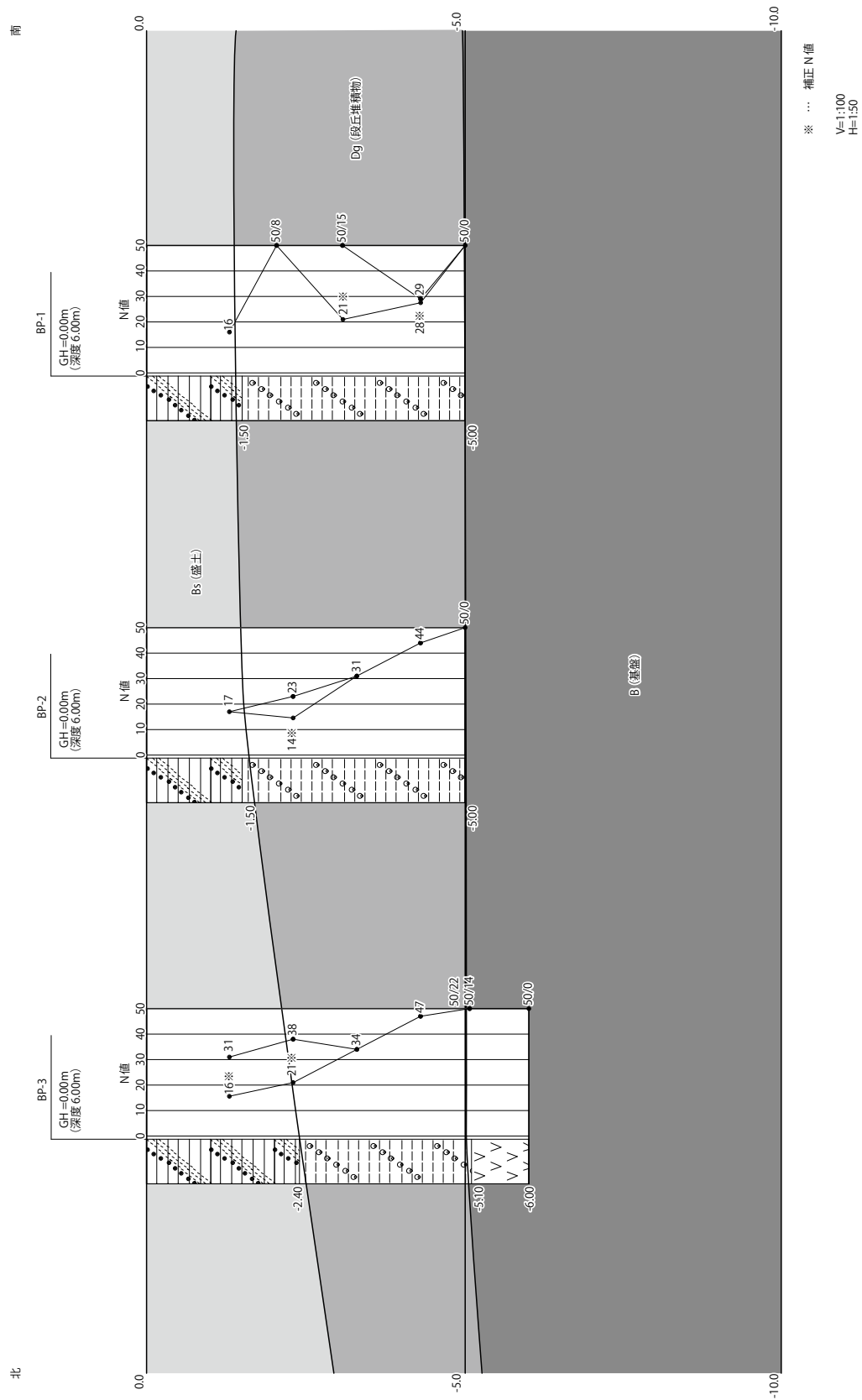
2 まとめ

本堂の南半分は段丘堆積物が成層し、北側は盛土構造である。盛土はΦ200～300mmあるいは、それ以上の粒径の安山岩の玉石を主体とし、それらの間隙には砂質粘土が介在している。今回3箇所でのボーリング調査のうち北側2本はGL-1.00以深より逸水を確認している。基盤岩である安山岩層は本堂南西から中央付近までやや盛り上がり、さらに北東方向に向かって急勾配で落ち込んでいる。

総合的に推測を行うと、永い年月をかけ基盤岩上に外錘性堆積物（安山岩質の礫～玉石及び砂質粘土）が覆い、その後北側に土留めの石垣を設け、それらの材料で盛土を行ったものと考えられる。

引用・参考文献

- ・『三佛寺本堂土質・地質調査報告書』 2009 サンイン技術コンサルタント株式会社



第8節 調査のまとめ

1 本堂関連遺構の確認

現本堂に関連する礎石等の基礎石や、その据付穴などの遺構を確認・記録することができた。一方で、焼土やピットなどについては性格が判断できなかった。

2 敷地の造成状況の確認

トレンチ調査での土層確認によって、本堂地盤の造成（盛土）に関わる情報を得ることができた。また、トレンチ調査の及ばない深い部分についても、ボーリング調査によって土層情報を補足することができた。

特に、自然に形成された段丘堆積層と造成土の境界が確認できたことによって、造成の大まかな規模を知ることができた。

三佛寺本堂の立地と天保10年（1839）という下限を考慮すると、かなり大規模な造成が行われたとすることができる。当時の工事関係者の非常な尽力を感じざるを得ない。

一方で、トレンチ調査やボーリング調査によって、造成土の状態がかなり不安定であることも確認することができた。基本的には玉石や礫を大量に含んだ土で造成されており、緻密に衝き固めるような工法もとられていない。そのため、伏流水があると石の間に隙間を生じやすい状態となっており、これが事前の調査で確認された空隙の大きな原因と言える。

3 前身本堂遺構の所在

調査では、前身本堂の情報を得ることはできなかった。前身本堂が現在の本堂とは別の位置にあった可能性が考えられる。

敷地造成時期が確定できなかったため確実なことはわからないが、造成が古い時代であれば同じ本堂敷地内の別の場所に、造成が現本堂再建の直前であれば最大約5mもの厚さを有する造成土の下に遺構が残されている可能性がある。

4 石材の産地

本堂の縁束石・土台石・葛石、あるいは周辺の石段などに、大量の凝灰岩または凝灰角礫岩が用いられている。凝灰岩と凝灰角礫岩そのものは三徳山で珍しくないが、近隣には石切場が確認されていない。これらの石材をどこから、どのような方法を用いて搬入したのか不明であり、今後の課題である。

遺物観察表

番号	図版	層位	種 別	法 量 (mm)	備 考
1	9	1 上面	銭貨 (寛永通寶)	直径 21	銅銭 縮時 (吉田島) 元文 4 年
2	9	1 上面	銭貨 (寛永通寶)	直径 24	鉄銭
3	9	1 上面	銭貨 (天聖元寶)	直径 24	宋銭 真書 天聖元年
4		1 上面	銭貨 (竜一銭銅貨)	直径 28	角ウロコ 明治 8 年
5	9	1 上面	銭貨 (寛永通寶)	直径 23	鉄銭
6		1 上面	染付	高 80△ 幅 45△	
7		1 上面	銭貨 (半銭銅貨)	直径 22	明治17年
8	9	1 上面	銭貨 (寛永通寶)	直径 23	鉄銭
9		1 上面	銭貨 (半銭銅貨)	直径 22	明治 8 年
10		1 上面	鉄製品	高 61△ 幅 5	
11		1 上面	陶器	高 39△ 幅 37△	
12	9	1 上面	銭貨 (寛永通寶)	直径 23	銅銭 山城横大路銭 元文元年
13	9	1 上面	銭貨 (寛永通寶)	直径 23	銅銭
14		1 上面	銭貨 (桐一銭青銅貨)	直径 23	大正 9 年
15		1 上面	灯明皿	口径 22 高 20	
16		1 上面	銭貨 (半銭銅貨)	直径 22	明治 9 年
17	9	1 上面	銭貨 (寛永通寶)	直径 22	銅銭 大字背足 (足尾) 寛保元年
18	9	1 上面	銭貨 (寛永通寶)	直径 23	鉄銭
19	9	1 上面	銭貨 (寛永通寶)	直径 24	銅銭
20	9	1 上面	銭貨 (寛永通寶)	直径 25	銅銭 正字文 寛文 8 年
21	9	1 上面	銭貨 (寛永通寶)	直径 23	銅銭 細字背元 (高津) 寛保元年
22	9	1 上面	銭貨 (寛永通寶)	直径 24	鉄銭
23	9	1 上面	銭貨 (寛永通寶)	直径 24	鉄銭
24	9	1 上面	銭貨 (寛永通寶)	直径 23	銅銭 秋田大字 元文 3 年
25		1 上面	鉄製品 (釘)	高 51 幅 30	
26	9	1 上面	銭貨 (寛永通寶)	直径 23	銅銭 虎ノ尾寛 (十万坪) 元文元年
27		1 上面	鉄製品	高 32 幅 3	
28	9	1 上面	銭貨 (寛永通寶)	直径 23	銅銭 亀戸大字 元文 2 年
29		1 上面	銭貨 (菊十銭アルミ貨)	直径 21	昭和16年
30		1 上面	銭貨 (十銭錫貨)	直径 19	昭和19年
31		1 上面	銭貨 (竜一銭銅貨)	直径 28	角ウロコ 明治 8 年
32		1 上面	タイル	高 20 幅 18	
33		1 上面	銭貨 (竜一銭銅貨)	直径 28	波ウロコ 明治17年
34	9	1 上面	銭貨 (寛永通寶)	直径 24	銅銭 伏見手 元文元年
35	9	1 上面	銭貨 (寛永通寶)	直径 24	銅銭 吉田銭 寛永14年
36		1 上面	銭貨 (竜一銭銅貨)	直径 28	角ウロコ 明治10年
37	9	1 上面	銭貨 (寛永通寶)	直径 23	鉄銭

番号	図版	層位	種 別	法 量 (mm)	備 考
38		1 上面	銭貨（半銭銅貨）	直径 22	波ウロコ 明治10年
39	9	1 上面	銭貨（寛永通寶）	直径 22	銅銭 小字背元（高津） 寛保元年
40		1 上面	銭貨（竜一銭銅貨）	直径 28	波ウロコ 明治20年
41		1 上面	銭貨（半銭銅貨）	直径 22	波ウロコ 明治17年
42		1 上面	銭貨（半銭銅貨）	直径 22	角ウロコ 明治8年
43		1 上面	瓦	高 27△ 幅 25△	
44		1 上面	瓦	高 48△ 幅 25△	
45		1 上面	瓦	高 38△ 幅 29△	
46		1 上面	瓦	高 45△ 幅 28△	
47		1 上面	瓦	高 48△ 幅 22△	
48	9	1 上面	銭貨（寛永通寶）	直径 23	銅銭
49	9	1 上面	銭貨（寛永通寶）	直径 23	銅銭 山城横大路銭 元文元年
50	9	1 上面	銭貨（寛永通寶）	直径 23	銅銭
51	9	1 上面	銭貨（寛永通寶）	口径 23	銅銭
52		1 上面	銭貨（桐一銭青銅貨）	直径 23	大正8年
53	9	1 上面	銭貨（寛永通寶）	直径 21	銅銭
54		1 上面	銭貨（半銭銅貨）	直径 22	波ウロコ 明治20年
55		1 上面	タイル	高 32 幅 25	
56		1 上面	鉄製品（釘）	高 94△ 幅 4	
57	9	1 上面	銭貨（寛永通寶）	直径 23	銅銭 虎ノ尾寛（十万坪） 元文元年
58		1 上面	瓦	高 15△ 幅 12△	
59	9	1 上面	銭貨（寛永通寶）	直径 23	銅銭 岡山銭 寛永14年
60		1 上面	陶器	高 30△ 幅 19△	
61	9	1 上面	銭貨（寛永通寶）	直径 23	銅銭
62		1 上面	タイル	高 19 幅 18	
63		1 上面	タイル	高 26 幅 20	
64		1 上面	タイル	高 26 幅 20	
65	9	1 上面	銭貨（寛永通寶）	直径 23	銅銭 半分欠損
66		1 上面	銅製品	高 26 幅 23	68と同類
67	9	1 上面	銭貨（寛永通寶）	直径 23	銅銭
68		1 上面	銅製品	高 25 幅 23	66と同類
69	9	1 上面	銭貨（寛永通寶）	直径 23	銅銭
70		1 上面	銭貨（半銭銅貨）	直径 22	角ウロコ 明治6年
71	9	1 上面	銭貨（寛永通寶）	直径 25	銅銭 沓谷銭 明暦2年
72		1 上面	銭貨（竜一銭銅貨）	直径 28	波ウロコ 明治13年
73		1 上面	鉄製品（釘）	高 120 幅 8	
74	9	1 上面	銭貨（寛永通寶）	直径 25	銅銭 丸屋銭 正徳4年
75		1 上面	銭貨（桐一銭青銅貨）	直径 23	大正10年
76		1 上面	鉄製品	高 94△ 幅 11	

番号	図版	層位	種 別	法 量 (mm)	備 考
77		1 上面	タイル	高 27 幅 21	
78		1 上面	タイル	高 19 幅 18	
79		1 上面	銭貨 (桐一銭青銅貨)	直径 23	大正10年
80		1 上面	タイル	高 45 幅 42	
81		1 上面	タイル	高 26 幅 21	
82		1 上面	タイル	高 13 幅 11	
83		1 上面	タイル	高 20 幅 18	
84		1 上面	タイル	高 14 幅 12	
85		1 上面	タイル	高 14 幅 12	
86		1 上面	タイル	高 14 幅 12	
87		1 上面	タイル	高 27 幅 20	
88		1 上面	タイル	高 20 幅 18	
89		1 上面	タイル	高 20 幅 18	
90		1 上面	タイル	高 20 幅 18	
91		1 上面	タイル	高 20 幅 18	
92		1 上面	タイル	高 20 幅 18	
93		1 上面	タイル	高 20 幅 18	
94		1 上面	タイル	高 20 幅 18	
95		1 上面	タイル	高 21 幅 18	
96		1 上面	タイル	高 14 幅 12	
97		1 上面	タイル	高 26 幅 20	
98		1 上面	灯明皿	口径 84 高 20	
99		1 上面	銭貨 (小型五銭白銅貨)	直径 19	大正11年
100		1 上面	銭貨 (桐一銭青銅貨)	直径 22	大正 8 年
101		1 上面	銭貨 (十銭白銅貨)	口径 22	大正10年
102	9	1 上面	銭貨 (寛永通寶)	直径 22	鉄銭
103	9	1 上面	銭貨 (寛永通寶)	直径 23	銅銭 亀戸大字 元文 2 年
104		1 上面	銭貨 (半銭銅貨)	直径 22	波ウロコ 明治14年
105		1 上面	瓦	高 37△ 幅 24△	
106	9	1 上面	銭貨 (寛永通寶)	直径 24	鉄銭
107	9	1 上面	銭貨 (寛永通寶)	直径 24	銅銭 芝銭 寛永13年
108	9	1 上面	銭貨 (寛永通寶)	直径 22	銅銭
109	9	1 上面	銭貨 (寛永通寶)	直径 23	銅銭
110	9	1 上面	銭貨 (寛永通寶)	直径 23	銅銭
111		1 上面	銭貨 (竜一銭銅貨)	直径 28	角ウロコ 明治10年

第3章 三徳山妙光遺跡発掘調査

第1節 調査に至る経緯と概要

1 調査に至る経緯

現在の三徳山には三佛寺、輪光院、正善院、皆成院の1寺3院が現存するが、天正5年（1577）に南条元統が再興した際には12の僧坊があったと伯耆民談記等に伝えられている。また、仏像等の墨書などにも、現存しない僧坊の名称がいくつか見られる。

一方、山内にはこうした僧坊跡の存在が想定される平坦地がいくつか点在している。

平成20年度中に、三徳山歴史遺産調査の一環である埋蔵文化財調査の候補地としてこれらの平坦地が浮上した。

2 踏査と地形測量の実施

平成20年11月20日に、山内に点在する平坦地の1つである、正善院東側平坦地の踏査を実施した。その結果、地表面に遺構等を確認することはできなかったが、この場所に僧坊が存在した可能性は否定できなかった。

さらに、中央技術株式会社に委託し、この平坦地の地形測量を行った（平成20年12月10日～平成21年2月27日）。

こうした成果を踏まえ、僧坊跡をはじめとする遺構の有無確認を目的として、平成21年度にこの平坦地でのトレンチ調査を実施することとなった。

3 調査地の概要

調査地は三徳川左岸に形成された段丘上の平坦地である。標高は約300mであり、周辺には現存する寺院関連施設が集中する。東側は行者道の基点である宿入橋が架かる樋口谷、西は正善院境内、南は三佛寺境内にそれぞれ接する。

聞取調査によると、昭和期に稲作も行われたというが、現在は畑として耕作されている。

4 調査の経過と方法

現地での調査期間は平成21年10月5日～11月24日である。

名勝及び史跡三徳山の指定地であるため、調査は文化庁長官から現状変更の許可を得て実施した。

調査にあたっては、平坦地の中央やや西側に、2つのトレンチを設定した。いずれも長辺10m、短辺2mのトレンチを、第1トレンチは南北方向、第2トレンチを東西方向に直交する形で配置した。

掘削は全て手掘りである。掘削に伴い発生した排土については、比較的大きな石を分別した上ですべて土のうに詰めて保管した。

遺構及び遺物の記録にあたってはすべて手測りで実施した。

写真撮影は35mmのモノクロネガフィルム及びカラーリバーサルフィルムを基本とし、必要に応じて6×7判のモノクロネガフィルム及びカラーリバーサルフィルムでも撮影を行った。また、活用を見越して適宜デジタルカメラでの撮影も行った。

調査終了時には前述の排土を土のうから取り出し、埋め戻して原状に復帰した。

5 調査体制

調査主体	三朝町教育委員会			
	教育長	徳田洋輔	(平成22年2月26日まで)	
	教育総務課長	布廣 覚	教育総務課次長	石原伸二
	指導主事	藤原彰二	主幹	西田寛司
	副主幹	矢吹幸久	副主幹	山根幸恵
調査指導	主任	柚垣大作		
	鳥取県教育委員会			
	文化財主事	小山浩和		



図23 三徳山妙光遺跡周辺地形

第2節 調査成果

1 概要

2つの異なる時代の建物の痕跡（礎石・柱穴）、それに伴う雨落溝をはじめとする遺構を検出した。同時に、16世紀を中心とする陶磁器計40点が遺物として出土した。

2 土層堆積

図24・25のとおり。

第4層の黄褐色土が地山であり、地形に沿ってなだらかに傾斜している。

第3層の暗褐色土は第1トレンチ北側あるいは第2トレンチ西側に、地山が低くなっている部分を埋めるように分布している。土中には炭を含んでいることから、この地で火災があったことが想定される。上面が水平に近いことから、後に敷地面積の拡張のためにこの土を利用して盛土をした可能性がある。

第2層の黒褐色土は土坑の埋土、第1層の黒褐色土は現在の耕作土であり、両者はほとんど区別がつかないほどよく似ている。

3 検出した遺構

SK1は礎石とそれに伴う据付穴である。半裁断面には当たっていないが、礎石の下には根石が確認できる。SK12・SK16はSK1と同時期の礎石据付穴である。なお、これらの間にもう1つ礎石があってもよさそうであるが、現状では確認できない。

SK9・SK15・SK17は掘立柱建物の柱穴である。

SK18は上述のいずれかの建物に伴う雨落溝である。

そのほか性格不明の土坑13、焚火跡と思われる炭化面を1つ検出した。

4 出土遺物

出土遺物は国内のものが土師器16点、須恵器4点、陶器10点、輸入陶磁器類として青磁2点、白磁4点、染付4点で、すべて小破片である。

出土遺物全体を見ると時期的にばらつきがあるが、基本的には16世紀のものが多く、しかも16世紀が下限である。

輸入陶磁器類はNo.34の青磁（同安窯または竜泉窯・12～13世紀）を除き、いずれも16世紀中頃の中国（宋）から輸入されたものである。これは平成15年度に調査された行者屋敷跡出土遺物と共通するところである。

第2層中からの出土はすべて土師器であるが、時期的にばらつきがある。これは第2層が造成された際に、さまざまな時代のものが混入した可能性を示唆する。

No.20は火鉢、No.38は京都系土師器の皿である。

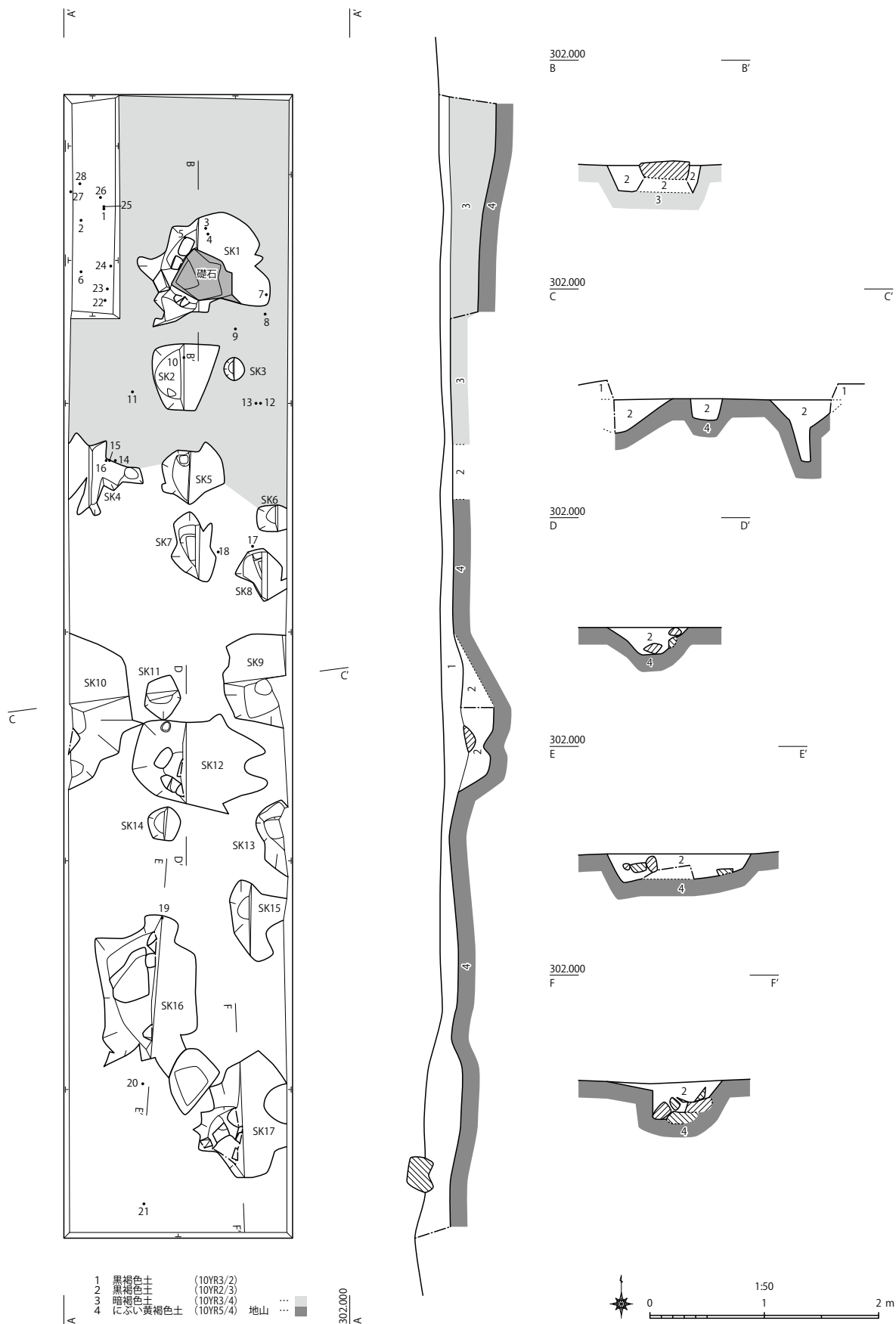


図24 第1トレンチ

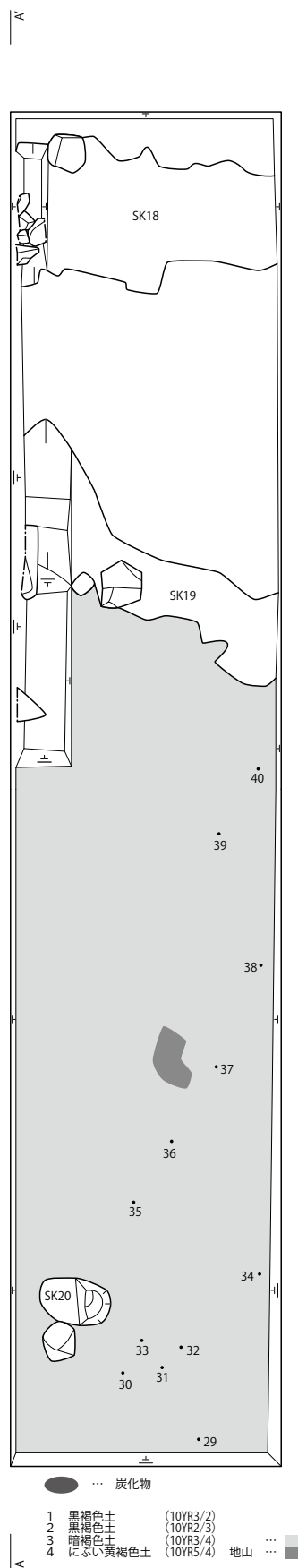
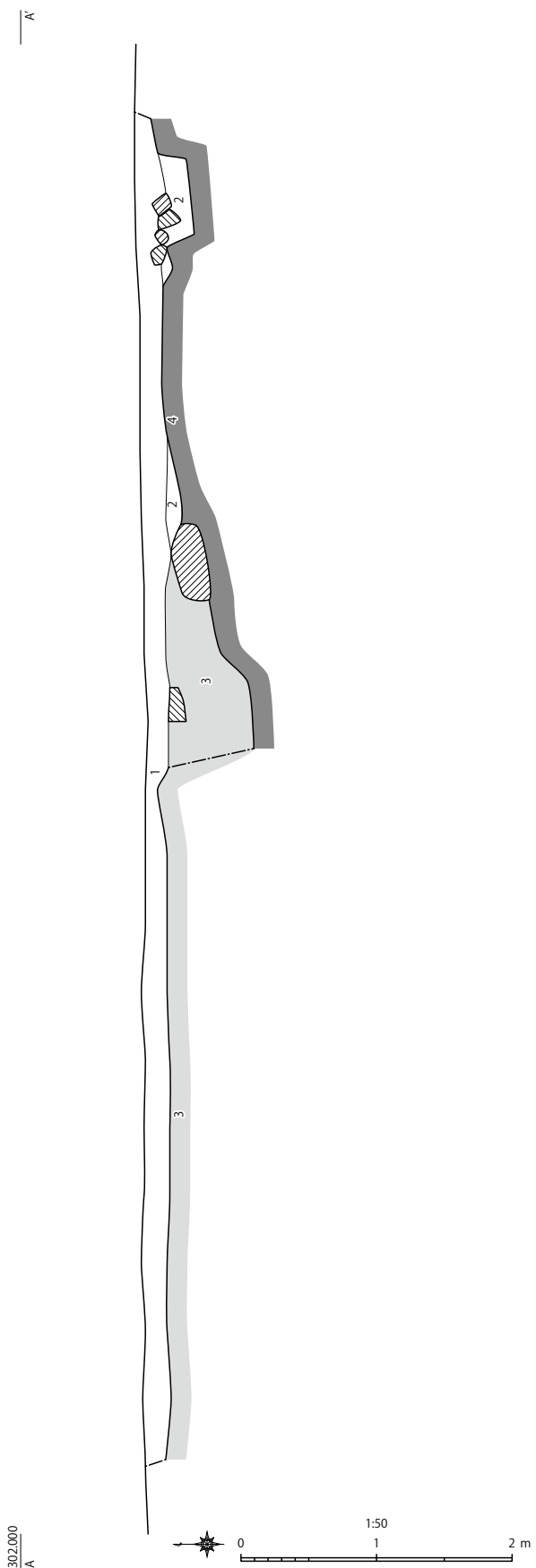


図25 第2トレンチ



第3節 調査のまとめ

1 建物跡の確認

調査では、2つの異なる時代の建物の痕跡（礎石建物・掘立柱建物）を確認することができた。

2 出土遺物の特徴

出土遺物は16世紀の陶磁器が中心だが、この中に当時は高級品で日常生活に使用しない16世紀の明（中国）からの輸入磁器類が含まれる。これは平成15年に調査を実施した行者屋敷跡と共通するものである。当時この地域を支配していた南条氏との関係性は、行者屋敷跡と同様にこの遺跡でも指摘できる。

3 遺跡の性格

建物跡のうち1つは礎石を伴う立派な建物であり、出土遺物の中に日常生活に使用しない輸入磁器類が含まれることから、この場所には寺院に関する施設が存在したと考えられる。

先述したように現在の三徳山には三佛寺・輪光院・正善院・皆成院の1寺3院が現存するが、南条元統が再興した天正5年（1577）には12の僧坊があったと伝えられている。今回確認した遺跡はこの失われた僧坊の1つであったと考えられる。

出土遺物の年代の下限から、僧坊は16世紀中には廃絶したと考えられ、南条氏による再興の後に再度兵火により荒廃し、現在に繋がる3院のみ修復されたという諸文献の記述を裏付ける。



図26 遺構の分布

遺物観察表

第1トレンチ

番号	図版	層位	種 別	法 量 (mm)	備 考
1		1	土師器 (鍋)	高 40△ 幅 71△	
2		1	備前焼 (壺)	高 31△ 幅 47△	
3	13	1	白磁 (皿)	高 15△ 幅 17△	16世紀中頃
4	13	1	染付 (皿)	高 10△ 幅 35△	16世紀中頃
5		1	備前焼 (甕)	高 97△ 幅 62△	
6		1	備前焼 (壺)	高 27△ 幅 48△	
7		1	白磁 (皿)	高 16△ 幅 100△	16世紀中頃
8		1	勝間田焼 (壺または甕)	高 33△ 幅 36△	12～13世紀
9		1	土師器	高 20△ 幅 19△	
10		1	土師器	高 20△ 幅 19△	
11		1	土師器 (高台付坏)	高 17△ 幅 45△	
12		1	土師器 (皿)	高 16△ 幅 32△	
13		1	土師器	高 10△ 幅 23△	
14		1	土師器 (皿)	高 15△ 幅 57△	
15	13	1	白磁 (菊皿)	高 39△ 幅 34△	16世紀中頃
16		1	土師器 (皿)	高 22△ 幅 78△	
17		1	土師器 (皿)	高 25△ 幅 43△	
18		1	陶器 (壺)	高 35△ 幅 30△	
19	13	1	染付 (碗)	高 18△ 幅 19△	16世紀中頃
20		1	土器 (火鉢)	高 33△ 幅 69△	
21	13	1	染付 (皿)	高 20△ 幅 24△	16世紀中頃
22		2	土師器 (皿)	高 17△ 幅 70△	平安時代～鎌倉時代
23		2	土師器 (皿)	高 14△ 幅 62△	
24		2	土師器 (高台付坏)	高 25△ 幅 76△	
25		2	土師器 (皿)	高 11△ 幅 74△	
26		2	須恵器 (皿)	高 20△ 幅 42△	土師質 9～10世紀
27		2	土師器 (高台付坏)	高 33△ 幅 83△	
28		2	土師器 (皿)	高 16△ 幅 65△	

第2トレンチ

番号	図版	層位	種 別	法 量 (mm)	備 考
29	13	1	青磁 (皿または盤)	高 10△ 幅 23△	16世紀中頃
30	13	1	白磁 (皿)	高 10△ 幅 40△	16世紀中頃
31		1	常滑焼 (壺)	高 68△ 幅 99△	
32		1	須恵器 (壺または甕)	高 60△ 幅 65△	中世
33		1	常滑焼 (壺)	高 14△ 幅 40△	
34	13	1	青磁 (碗)	高 35△ 幅 25△	同安窯または竜泉窯 12～13世紀
35		1	須恵器 (甕)	高 45△ 幅 55△	
36		1	備前焼 (壺)	高 67△ 幅 65△	
37		1	陶器 (甕)	高 55△ 幅 46△	
38		1	土師器 (皿)	高 7△ 幅 48△	京都系 16世紀前半
39		1	染付 (碗)	高 36△ 幅 23△	16世紀中頃
40		1	須恵器 (甕)	高 55△ 幅 35△	古墳時代

図 版



三佛寺本堂発掘調査風景

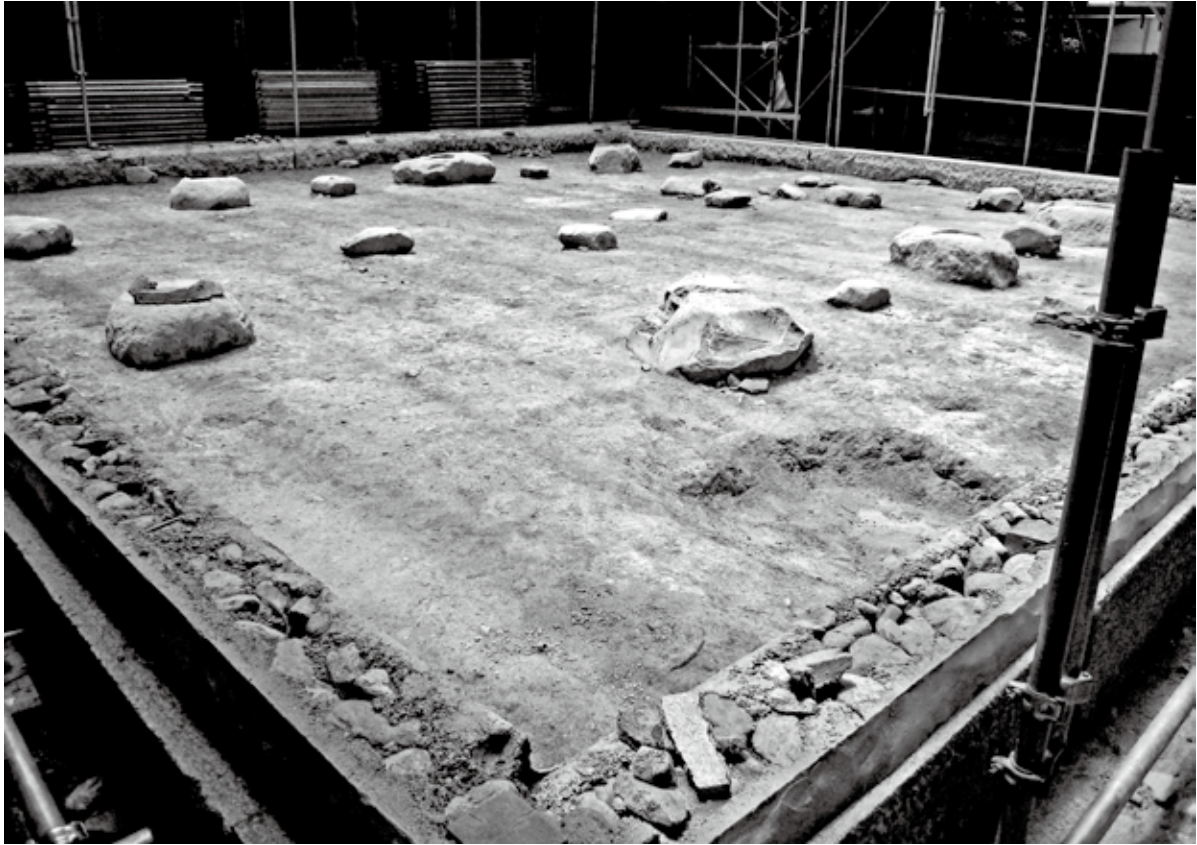
図版 1 三佛寺本堂



1 三佛寺本堂（平成16年12月撮影）



2 美徳山三佛寺境内絵圖（部分）



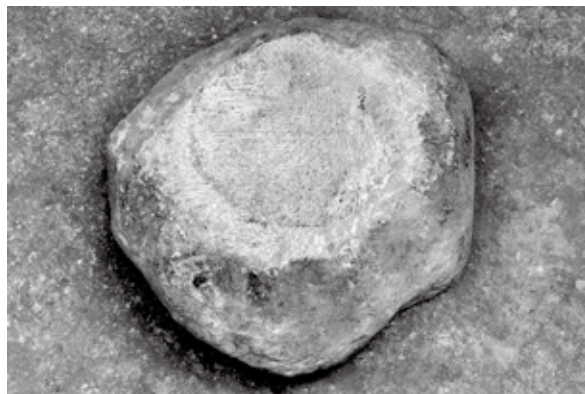
1 調査前（北東から）



2 調査前（俯瞰・北東から）



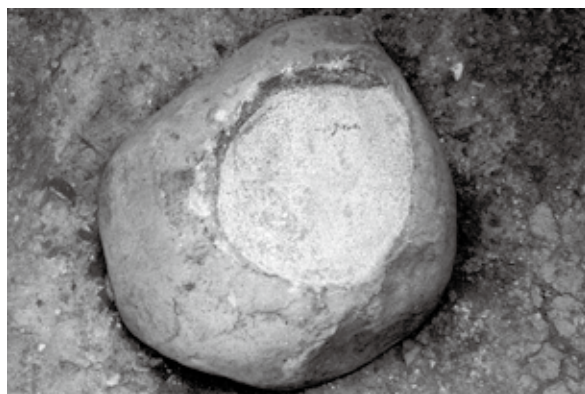
1 礎石1（北西から）



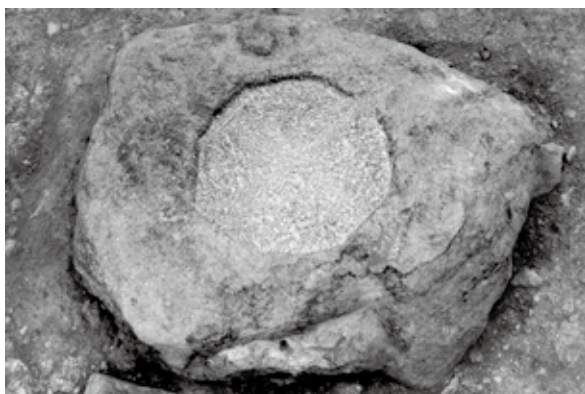
2 礎石2（北西から）



3 礎石3（北西から）



4 礎石4（北西から）



5 礎石5（北西から）



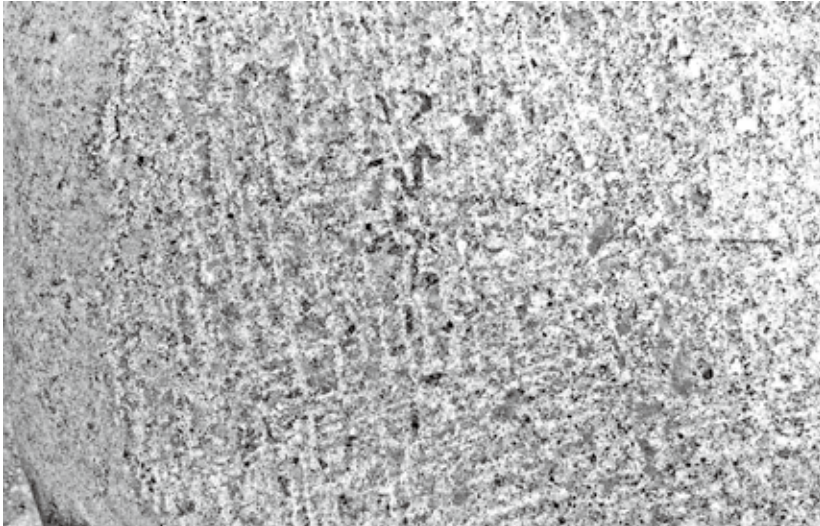
6 礎石6（北西から）



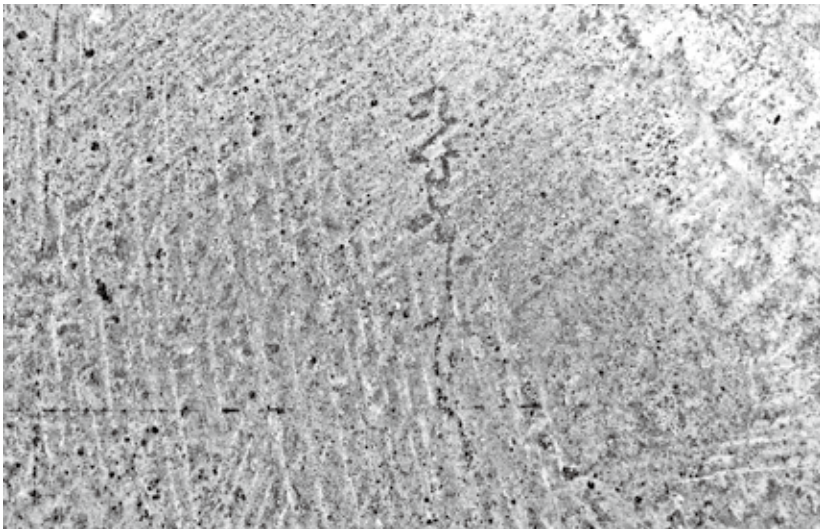
7 礎石7（北西から）



8 礎石8（北西から）



1 礎石 1 墨書（北西から）



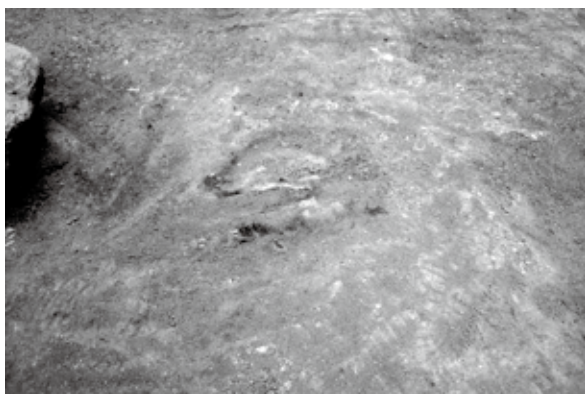
2 礎石 2 墨書（北西から）



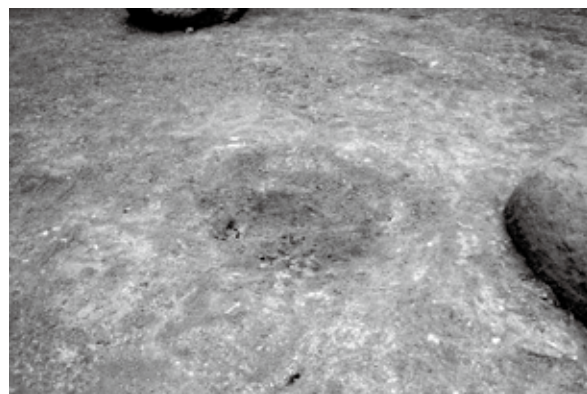
3 礎石 4 墨書（北東から）



1 遺構検出（俯瞰・北東から）



2 SF10（北西から）



3 SF11（北西から）



4 SK 1（北西から）



5 SK 3（南東から）



1 トレンチ設定（俯瞰・北東から）



2 第1・第2トレンチ設定（北東から）



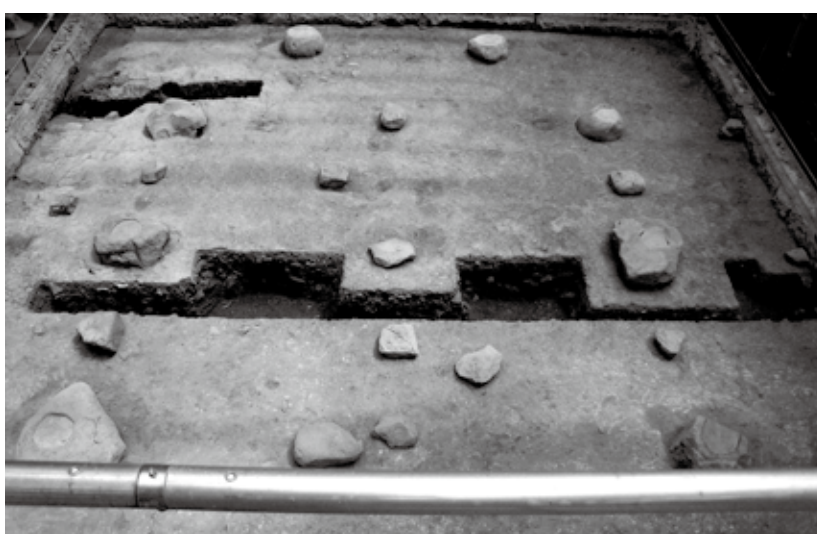
3 第3トレンチ設定（俯瞰・北西から）



1 トレンチ完掘（俯瞰・北東から）



2 第1・第2トレンチ完掘（北東から）



3 第3トレンチ完掘（俯瞰・北西から）



1 第1トレンチ南壁東部（北から）



2 第1トレンチ南壁西部（北東から）



3 第2トレンチ東壁（北西から）



4 第2トレンチ西壁（南東から）



5 第3トレンチ東壁北部（北西から）



6 第3トレンチ東壁中部（北西から）





1 第1トレンチ調査前（南から）



2 第2トレンチ調査前（東から）



3 第1トレンチ設定（南から）



4 第2トレンチ設定（東から）



5 第1トレンチ第1層除去（南から）



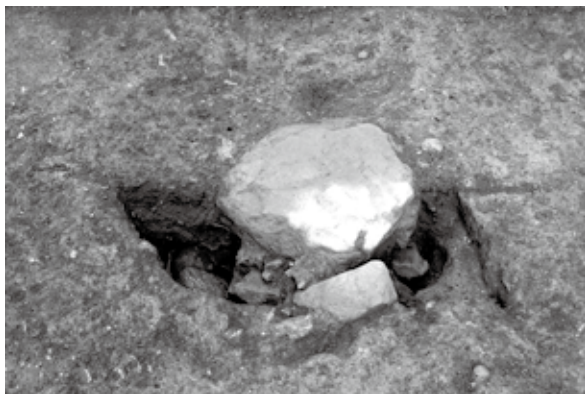
6 第2トレンチ第1層除去（東から）



7 第1トレンチ完掘（南から）



8 第2トレンチ完掘（東から）



1 礎石・SK1（西から）



2 SK9（南から）



3 SK12（西から）



4 SK15（西から）



5 SK16（西から）



6 SK17（西から）



7 SK18（北西から）



8 SK18北部断面（南から）



1 第1トレンチ西壁（南東から）



2 第2トレンチ北壁（南東から）



3 調査地全景（北西から）

白磁



3

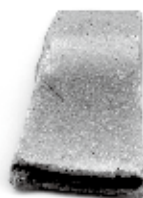


15



30

青磁

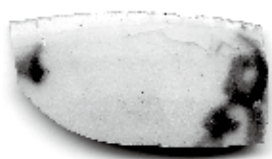


29



34

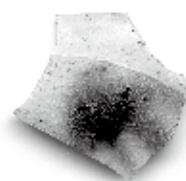
染付



4



19



21

報告書抄録

ふ り が な	めいしょうおよびしせき みとくさん はっくつちょうさほうこくしょ 3
書 名	名勝及び史跡 三徳山 発掘調査報告書 Ⅲ
副 書 名	三佛寺本堂発掘調査・三徳山妙光遺跡発掘調査
巻 次	
シリーズ名	三徳山歴史遺産調査報告書
シリーズ番号	5
編 著 者 名	柚垣大作
編 集 機 関	三朝町教育委員会
所 在 地	〒 682 - 0195 鳥取県東伯郡三朝町大字大瀬9 9 番地 2 TEL 0858 - 43 - 1111
発行年月日	西暦2010年 3月

ふ り が な 所収遺跡名	ふ り が な 所 在 地	コード		北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さんぶつじけいだい 三佛寺境内 いせき 遺跡	とっとりけんとうはくぐん 鳥取県東伯郡 みささちようおおあざみとく 三朝町大字三徳	31645	2 - 22	35° 23' 57"	133° 57' 23"	20080723 ～ 20080929	2 2 5m ²	建物修理 学術調査
みとくさんみようこう 三徳山妙光 いせき 遺跡	とっとりけんとうはくぐん 鳥取県東伯郡 みささちようおおあざみとく 三朝町大字三徳	31645	-	35° 24' 00"	133° 57' 23"	20091005 ～ 20091124	40m ²	学術調査

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三佛寺境内 遺跡	寺院	江戸時代	焼土 ピット 土坑	銭貨 陶磁器 金属製品	-
三徳山妙光 遺跡	寺院跡	安土桃山時代	礎石 土坑・柱穴 雨落溝	陶磁器	-

要 約	三佛寺本堂発掘調査（三佛寺境内遺跡） 前身本堂の遺構は確認できなかったが、現本堂の基礎石の記録と、それに伴う据付穴などの遺構の確認を行った。土層の確認によって、時期は確定できないが敷地造成（盛土）が大規模であることを確認した。地盤沈下と地下の空隙の原因となっている造成土の状態を確認した。 三徳山妙光遺跡 2つの異なる時代の建物の痕跡（礎石建物・掘立柱建物）を確認した。建物跡のうち1つは礎石を伴う立派な建物であり、出土遺物の中に日常生活に使用しない輸入磁器類が含まれることなどから、16世紀に戦火で失われた僧坊の1つと考えられる。
-----	--

名勝及び史跡 三徳山

発掘調査報告書 Ⅲ

発行日	平成22年3月
編集・発行	鳥取県三朝町教育委員会
	〒682-0195
	鳥取県東伯郡三朝町大字大瀬99番地2
	☎(0858)43-1111
印刷	有限会社 矢積印刷